

# 小確幸

~~台湾あれこれ



編著者 喜早天海



台中駅は日本時代の1905年（明治38）に開業し、1917年（大正6）落成した駅舎はバロック式の風格ある駅として台中の玄関として一世紀にわたり君臨してきました。台湾鉄道豊原・台中間の踏切撤廃に伴い台中駅は高架式となったことにより、2016年に本来の役目を終えて今では国定古跡として保存されています。今年7月に駅前広場はリニューアルされ、広場周辺には初代の駅施設の遺構と二代目の駅舎と2016年に開業した新駅舎が共存しています。長い間台中市民のランドマークだった駅舎は「台中の小京都」と呼ばれていた旧市街地の再生を静かに見守っているのです。

## はじめに

### はじめに

皆さんはこの冊子のタイトルを見て「小確幸」って中国語？

それとも日本語？ 小確幸って何なの？と疑問を持ったことでしょう。

それは次のようなことがあったからなんです。

今年の二月初めに台中市内をバイクに乗って走っていると、不動産会社の販売するマンション「小春日和」の看板広告が目にとまりました。



「小春日和の四字熟語は中国語にないよな。」と思ってよく見ると漢字の左下に「しょうかっこ」と平仮名で書いているではありませんか。「小学校でもないし正月でもないし、これは何の意味？」としばらくの間その意図とする意味がわからなかったのです。

すると、一か月後友人から送られてきたメルマガ記事を読んで「あ～そうだったのか」と納得したのです。

台湾では数年前に「小確幸」が流行したそうですが、これは作家の村上春樹の造語で、漢字をそのまま読むと「しょうかっこう」、でも書かないと聞いただけでは何の意味かわかりません。「小さいけれども確かな幸せ」の意味なのです。

台湾の人たちは「ありがとう」の発音は正しく「有難うー」と言っても、書く時は長音の「う」は省いてしまう人がほとんどなのです。「しょうかっこ」も同じ道理。現地の人には「小確幸」と書けば誰でもわかるのに、「小春日和」が日本語なら「しょうかっこ」も日本語（平仮名）で書けばナウイ広告文と考えたからではないのでしょうか。例えば日本人が「驚く」の日本語を使わず「サプライズ」なんてカタカナで書くような感覚かもしれませんね。

ともあれ、意味がわかって「小確幸」でした。

そんなわけで、今回の冊子のタイトル（副題：台湾あれこれ）にしたわけです。

本冊子は『遥かなり台湾』シリーズに続くものとしてF B記事に投稿した文章や未公開の文章、そして台湾で知り合った人たちのネットに投稿された文章なども含めて、台湾に関するあれこれをまとめたものです。

それでは読者の皆さんに興味のある個所から、これまであまり知らなかった台湾の世界を知ることにより、ささやかな幸せを感じたと思っただけなら幸甚です。なお、転載した原稿や写真の中には、紙面の関係上、一部割愛または修正された個所などが生じたことをご了承ください。最後に本冊子に転載許可して下さった皆さんには深く感謝します。

2018年 初夏

## 台湾のあいさつ

台湾には原住民、ホーロー人（戦前から住んでいる台湾人）、客家（ハッカ）人と終戦後にやって来た中国人と大まかに言って四種類のグループがあり、それぞれ違う言葉で話しています。戦前日本統治時代は日本語が国語でしたが、戦後は中国人が話す北京語が「国語」になりました。

それで、国語での挨拶は、朝は「早安（ザオアン）」単に「ザオ」だけでも通じます。昼近くからは「こんにちは（ニーハオ）」と挨拶しています。台湾語では台湾人と客家人の挨拶は似ていて、「早いですね（ガウツァー）、または「ご飯食べた？（チャパーブエ）」が挨拶です。これは昔の中国はいつも内乱、内戦、災害などによって生活苦が続き、朝食も食べられなかった時代が続いたことがあり、その生活苦の中からのじみ出たことば---これが挨拶の形になったとか。実に重みを持った一言ですね。でも飽食の現在。それよりも「元気？」の「リーホーボ？」に変わって来ているようです。

過日図書館で盧千恵さんの著書『フォルモサ便り』を見つけ読んでいるとその中に下記のように原住民の挨拶が紹介されていました。

30年間日本に滞在したあと、国へ戻って来た私たちは、ちょうどその年国連の原住民年だったこともあって、当時、台湾唯一の原住民大学、玉山神学院へ教えに行きました。アミ族のルギーはいつも美しい声で「ガイアイホ（お元気ですか）」と挨拶してくれました。道で出会ったブヌン族の学生から「ミフミサ（まだ生きてるのー？まだ空気吸っているー？）」とにっこり笑いながら声をかけられ、びっくりしました。急いで「生きてるー」と返事をし、何ていい挨拶だろうと思いました。ブヌン族は玉山の中腹、1500メートルの深山に住んでいるので、この様な挨拶言葉が出来上がったのでしょう。勇猛なルカイ族は「今日の酒量はどうだ？」と問い、「うん！ うんと飲めるよー」が「今日は健康だ」と相手を安心させる返事だと、神学院で隣に住んでいた林道生教授が話してくれました。（p 109）

かつて子供の頃田舎（山形）では出会った人から「何処へ行くの？」と聞かれ「うん、ちょっとそこまで」と答えていました。聞いた本人は「マジで何処に行くのか」と尋ねたわけではなく挨拶かわりだったのです。だから答える方も「曖昧な返事」でよかったわけです。考えてみると台湾での上記の挨拶も同じように人とのコミュニケーションの潤滑油のようなもので、あいさつとは自分の心を開いて相手に近づく第一歩ともいえるでしょう。

台湾でこのほかにどんな挨拶の言葉がかわされているのか俄然興味が湧いてきました。ご存知の方はどうか教えてください。



# 緑川に架かる橋

## 緑川に架かる橋

風なごむ 南の島 空青く 気澄める所

緑川流れ豊かに 我らが市 ここぞ台中

これは日本時代の台中市の市歌で、緑川のことを歌われています。台中で生まれ育った日本人は少女時代のことを思い出しながら小学校の同窓会でこの市歌を歌っていたそうです。

台中の近くを流れる「緑川」が春節前に再生されました。この川にかかる橋の一つに「中山緑橋」と呼ばれている橋があります。この橋は日本時代は新盛橋と言われ、橋には装飾が施され、スズランの花が描かれていてこの橋の前の通りは台中一の繁華街と呼ばれていた鈴蘭通り。大正元年（1912）当時の佐久間総督が台中神社鎮座祭りに臨席した折に新盛川の柳の生い茂る緑の景色を大いに称賛され、この川を緑川と名づけたそうです。それ以来緑川は戦前の市歌に登場したわけです。それから一世紀余り立った一昨年、橋のそばに新盛橋（Shinsei-bashi）ホテルが出来るとは思いもありませんでした。

今年2月19日にFBに上記のような文章を投稿した半月後、いつも見ている「台湾フォーカス」に下記の様な記事が載ったのです。

（台中 2日中央社）中部・台中市の目抜き通り「台湾大道」の下部に隠れていた築103年の「桜橋」が復元された。道路下には歩道が設けられ、当時から残る土台部分を間近で見することもできる。

日本統治時代の1915（大正4）年に建設された桜橋は、かつて京都の鴨川になぞらえて「小京都」と呼ばれた緑川に架かる橋。長い間、台湾大道の拡張工事に伴って撤去されたと思われていた。

2015年から緑川の景観整備を進めてきた台中市政府。関連工事中に桜橋の橋桁や橋脚が残されていることが判明したことを受け、土台の保存と欄干の復元を決めた。周辺の景観整備は先月完了、新しさの中にも懐かしさを漂わせるスポットとして生まれ変わった。

緑川には桜橋のほか、1908（明治41）年に架けられた中山緑橋（旧名：新盛橋）も残り、川辺の遊歩

道を散策しながら歴史の息吹を感じることができる。また、4月8日までの毎晩、イルミネーションも楽しめる。



1908年（明治41）台湾縦貫鉄道が完成した時に台中公園で記念式典がありましたが、台中駅とを結ぶ役割をしたのが、緑川に架かる橋で最も古い橋が新盛橋で、もう100余年になります。戦前と戦後を結び、また20世紀と21世紀を結び台湾と日本とも結ぶ架け橋なのです。

台湾で一番高い所にある郵便局

皆さん、どこにあると思いますか。

そうです。阿里山にある郵便局です。この郵便局は民国前四年前と言いますから、西暦1907年は明治40年にあたります。そしていま目の前にある建物は、まるで圓山ホテル風の豪華な造りで、とても郵便局には見えませんね。



阿里山には郵便局以外に学校やセブンイレブンも台湾で一番高い所にあるんです。

学校の名前は香林国民小学校と言い、標高が一番高い所にある阿里山唯一の小学校なのです。



そしてセブンイレブンの入口前に標高2200メートルと書かれてありました。ここは観光地にあるためにおみやげ物が多く、絵はがきを買って向かい側にある郵便局から日本の家族や友達などに出したらきっと喜ばれますよ。

阿里山と言えば日の出が超人気。ホテルから朝早く出発するワゴン車に乗れば台湾最高峰の玉山が目の前に見えるスポットに案内してくれて日の出の写真がきれいにとれたら最高の思い出になりますよ



阿里山から見た玉山の日の出（2018年の年賀状に使用）



## 我が家の憲法

今日本では憲法9条をめぐる護憲派、改憲派に分かれていろいろと論争がにぎやかですが、今日のテーマは台湾のある家庭で今もなお守られている憲法の話です。



あれは埔里に住む医師の陳慶祥先生と絹枝夫人（当時お二人は89歳）を訪ねた時のことです。奥さんはぼくと同じ山形出身で、何でも先生が戦前東京で学生生活をしていた頃知り合い結婚し終戦後先生が台湾に帰ることになり一緒についてきたとのこと。ぼくは奥さんと同県人だとわかって親近感を覚えたのでした。陳先生家族は3世代同居、即ち陳先生夫婦は日本語と台湾語、息子さん夫婦は台湾語、中国語、お孫さんは中国語と世代によって話す言葉が違います。こういうことは、陳さん家族だけでなく台湾の三世代家庭では珍しいことではありません。先生宅をお邪魔したが午後2時過ぎで、夕方近くになっておいとましようと思っているとお孫さんの「ただいま！」という元気のよい声。すかさず絹枝さんが「お帰りなさい！」と言ったので、

「お孫さんは日本語わかるんですか？」と聞いたら、

先生は、

「我が家では挨拶はすべて日本語で言うことにしている。

いわば我が家の憲法みたいなものだよ。朝起きたら『お早う』、食事の時は『いただきます』、食べ終わったら『ごちそうさま』、出かけるときは『行ってきます』、何か他人からしてもらったら『ありがとう』という風にね。

第一、声を聞いたら子供が元気かどうかわかるし、何よりもあいさつは生活の基本であり、我々が日本語教育を受けたので日本式にやっているだけだ。」と言われたのです。

陳先生夫妻は惜しいことに3年前に相次いで他界されてしまいました。この話がいつまでも耳朶に残っていて、昨日は憲法記念日で、皆さんにふと陳先生の家々の憲法を話したくなった次第です。

## 虎尾三宝

台湾が好きだと言ってもほとんどの人は虎尾に行ったことがないと思います。なぜ虎尾？にと、言えばここに日本時代からの建物があると知ったからです。台中から南下し斗六駅で下車し台西バス乗ること約半時間、虎尾の繁華街に着きました。虎尾三宝と呼ばれている目指す建物は降りたバス停の目の前にありました。



### 1 雲林布袋戲館（旧虎尾群役所）

「雲林布袋戲館」は日本統治時代の西洋建築の建物で、日本統治時代の建物が多く残る台湾ですが、このような建築が残されているのは稀です。こちらの前身は大正11年に落成した「虎尾郡役所」であり、昭和6年にはイギリスビクトリア時代の赤レンガ建築で増設しています。布袋戲とは、わかりやすく言えば指人形劇のこと。布袋戲の故郷と言われている雲林県では、布袋戲の普及を願い設立したそうです。建物の中には代表的な劇団の歴史などや布袋戲の人形などが展示してありました。

### 2 雲林故事館（虎尾郡守官邸）

こちらは布袋戲館の並びにあり、日本時代は虎尾郡守官邸だったところです。終戦後は雲林地方裁判所の官舎として使用され、2005年の全面的な改修を経て翌年2006年に雲林故事館としてリニューアルオープンし、当時の文化や生活が展示再現、文化イベント館として利用されているのです。



雲林故事館 <http://www.ylstoryhouse.org.tw/index.php> -3 旧虎尾

### 合同庁舎（誠品書店&スターバック）

旧虎尾合同庁舎は昭和14年（1939年）に落成し、虎尾郡役所直属の派出所と消防組聯合事務所として使われ、2階は公会堂として使われていました。4階建ての建物で中央の塔の頂部には見晴台があり、

虎尾の町を見渡すことができたため、糖廠の煙突、大崙脚水塔とともに虎尾の三大高層建築と称されていました。虎尾合同庁舎の建物は5階建ての高さで、かつては虎尾一の高さでした。これは、当時電話がまだ発達していなかった時代、消防組がここから町を一望することで火事が起きた際すぐに出動できるようにしていたためです。



現在、建物の右側がスタバ、左側が書店になっている。

幸福駅と合興駅

北海道帯広からの情報です。北海道にある「幸福駅」は縁起のよい名前を持つことから全国的に高い人気を誇り1987年に広尾線が廃線となった後も多くの観光客が訪れています。2008年には恋人の聖地にも選ばれました。一方の台湾、内湾線（新竹県）にある合興駅も無人駅、1960年ごろに男子高校生が、思いを寄せる女子高校生の乗った列車を同駅から走って追いかけたという話が有名になり、愛情駅と呼ばれるようになったそうです。そして廃駅の危機を乗り越え関係者の働きによって保存が決まり、今では「恋人の聖地」として有名観光地になっているとか。日台双方の恋人の聖地が2016年10月に姉妹駅になったのでした。





(幸福駅)



(台湾/内湾線)

にある合興駅)

友好駅協定が結ばれたことを記念して「合興駅が愛情駅と呼ばれているわけは？」とか「合興駅」についての詳細な説明文を書いた看板が幸福駅舎の前にある二両の列車内に展示してあります。しかし幸福駅を見に来た観光客はここで記念写真を撮ったり、トイレに行ったり、お土産屋を覗いたりして限られた時間内でわざわざ列車内に入って何かあるか見てみようなどとする人は少ないのです。事前にガイドさんから「列車内に日本と台湾の二つの駅が友好協定を結んだときの紹介があるよ。」とでも事前に案内があればいいのですが-----。また観光客の目につくような場所に友好駅協定の看板を置いてくれたらもっと台湾のPRになると思います。

一部の人の中には「市は中国の都市とも姉妹都市になっているので台湾の駅と協定を結んだことは人目につかない所においているんだよ。でも、どこで友好協定を結ぶのかは自由であり、いちいち中国に気兼ねをする必要はないのでは」と思っている人もいます。

こんな小さな駅にも中国の意向が働いているのでしょうか。幸福の文字が色あせて見えてきますね。

過日知人の書道家である渡辺さんが個展を開いている国父記念館に訪れた時のことです。そこ台北市発刊の広報機関紙『TAIPEI』が置いてありました。ここ台湾で一冊の本がすべて日本語で書かれている広報機関紙を手にするのは初めてであり、何気なくページをめくっていると、何と知り合いの人の紹介記事が載っていたのです。どんなふうに紹介されているのか興味深く読みました。以下はその内容です。

# TAIPEI

Vol. **12**  
2018  
夏季号

台  
北

ミシュランも愛する  
美食の都・台北



ミシュラン級の旅を台北で  
MRT 沿線大捜索



個性的なバーで過ごす 楽しいほろ酔いの夜

台北で盛り上がるクラフトビールシーン

「23号啤酒」のマスターと語る

ごちそうさま！ 幸せのひとつときの味 料理研究家・長浜智子さん

文 江欣盈写真 施純泰

2016年2月、旧台北城の城門のひとつ、北門「承恩門」がかつての姿を取り戻しました。百年の時を越えて変わらぬうららかな光を浴びるその姿に、台北の人々はふと、最先端に行く台北という都市にも奥深くに昔ながらの魂が秘められていることに気が付きました。この大地に暮らす人々は一日三食とともに日々の味わいをかみしめています。一食、一日、一年、ふだんの食生活が積み重なって歳月となり、味わいは時を越えて思い出を呼び起こし、心のふるさどを見つけます。結婚して台湾に住み十数年となる長浜智さんはだしのうまみを通じ、子どもころの日本の家庭料理の味わいを再現します。忙しく動く手先がお鍋の音をお供に、台北の時間を細やかにゆったりとしたものに変えていく—こういった日々そのものが家というものなのでしょう。

想いのこもった味わい、味わいへの想い

「故郷の味を伝える」、これは海外で暮らす母が子供のためにできる最も奥深い文化の伝承でしょう。

長浜さんは2002年に台北で新生活をスタート。何度も台湾を旅して素晴らしいイメージを抱いていたことに加え、ひとりで中国、香港、台湾で学んだり働いたりした経験から台湾に移り住むことには抵抗がなかったといいます。台湾の食べ物や人々の親しみやすさと温かさが大好き。でも出産してからというもの、自分と社会とのつながりが希薄になる一方で、子どもが大きくなるにつれ、急速にふるさとという概念を持つようになり、長浜さんはあらためて考えざるを得なくなりました。海外で暮らす母親として、子どもに何がしてあげられるだろうか、と。



長浜さんは著書で、料理教室の一回目はまずおにぎりのみそ汁を教え、ご飯を炊く、だしを取る、という基礎の基礎から食べ物本来の味を知ってもらうと説明します。（写真／Mini Cook）

「子供の味覚は10歳までに培うべきということが言われますが、外食ばかりだと母の味は記憶に残りませんよね」。母親とはほぼすべての人々の味の啓蒙者。食が人に与える文化の洗礼は形、色、香りを備えたものです。そこで長浜さんは料理の研究に打ち込みます。味の基本であり真髄である昆布、かつお節、いりこ、シイタケの四大だしから始め、「智子さん家の食卓」を豊かにしていきます。すると自然と母のことを思い出したといいます。「子供のころは外食をするのは不便で、毎食母が作っていましたし、あたり前だと思っていました。仕事で香港に住んだときにはじめて、毎日誰かがごはんを作ってくれるということはあるがたく、容易ではないことに気付きました」。

## 和食の世界、世界の和食

毎食手作りするのはどんな時代でもとても気力を使うものです。このファストフードの時代ではなおさら。時は金なり、されど背に腹は代えられぬ。長浜さんによれば、20年前の晩ごはんは、焼き魚、煮もの、みそ汁、ご飯と、まだ伝統的な和食のスタイルでした。けれども今ではハヤシライスにサラダなどワンプレート料理が増えています。通常の日料理は伝統的な和食に加え、ヨーロッパやアメリカ、アジア、中華などが含まれますが、手早く簡単に済ませられるということで、スプーンやフォーク一本または手づかみで食べられるような、サンドイッチ、パスタ、ピザ、カレーライスなどが日本の家庭料理に取って代わられるようになってきました。このような変化を感じた長浜さんは、長年にわたる料理の経験をまとめ、台湾の人の好みに合わせて味を変えない、日本の家庭料理教室を始めました。

今年の3月、長浜さんが発起人となり、台湾大学と日本の龍谷大学、特定非営利活動法人日本料理アカデミー、エバー航空の間を取り持ち、台湾大学の集思会議センターで講座を開催。「味わいで知る日本料理」と題し、『うま味』を出発点に日本料理入門の手ほどきが行われ、最も代表的な懐石料理を切り口に、和食文化が追求する五感の究極の美について話し合われました。

日本の食の歴史において、19世紀、20世紀、戦後と大きく変わり、21世紀に入り和食がまた衰退し変化の時を迎えています。日本の各方面の取り組みにより2013年、「多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重、健康的な食生活を支える栄養バランス、自然の美しさや季節の移ろいの表現、正月などの年中行事との密接な関わり」という4つの特徴を持つ和食がユネスコ無形文化遺産に登録されました。中でも日本料理アカデミーの村田吉弘理事長の尽力には目を見張るものがありました。衰退のピンチをチャンスに変え、日本料理はここ10年ほどで世界を席卷するようになってきました。2018年、先ごろ発表されたばかりの「台北ミシュランガイド」でも星に輝いた20のレストランのうち6つが日本料理店です。また、世界のミシュラン星付きレストランの中でも日本料理店の数は他国に引けをとらないほどの数で、世界から愛されていることがうかがえます。

## 料理のこころ、こころの料理

和食はいま、さまざまな形で世界で花開き、漆器に描かれた蒔絵のようにきらきと、人々の命に輝きを添えています。けれど思い出の中のセピア色の食卓を思い浮かべると、家庭料理は柔らかい布団のように、家族の緊張をほぐし、疲れを癒し、暮らしの中の断絶を埋めてくれるものでした。2人の男の子を持つ母である長浜さんは休みになるとサッカー場や郊外の山と自然に足を運んで過ごします。今年初めには公館から桃園大溪まで往復80キロメートルのサイクリングを敢行しました。「子供たちには料理ができるようになってほしいです」と語る長浜さん。ちょうど愛情のこもっただしとうま味のように、料理の秘密を教えてください。食卓を囲む面々はそれぞれ違っても、私たちにはご飯を作ってくれる人のことがいつも心のどこかにあるのでしょうか。

(長浜智子さんのプロフィール)

日本の大阪出身、2002年から台湾在住。長年にわたり料理を教える。天然、素材本来の味、シンプルを原則に台北の各地で日本の家庭料理教室を開く。だしで伝統的な和食の真髓を表現し、料理への情熱を呼び覚ましてほしいと願う。著書に料理本『鮮味高湯的秘密：掌握四大高湯食材熬煮關鍵，做出道地的日式家庭料理（おいしいだしの秘密—4のだしの取り方のコツをつかんで本場の日本料理を作ろう）』がある。







移民共生先進国・台湾に見る「お手伝いさん」のススメ

栖来ひかり（台湾在住ライター）

「猫の手でも借りたい」という言葉がある。

そして、実際に猫の手を借りた『[きょうの猫村さん](#)』（ほしよりこ/マガジンハウス）という漫画がある。家事全般に長けたネコの「猫村ねこ」さんが、とある富裕で事情持ちな家庭に家政婦として派遣される話だ。この猫村さん、料理もお掃除もパーフェクトなのに、緊張して爪を研いだり毛を舐めたり猫舌だったりと何とも愛くるしい。猫だけに人間の事情にもちょっと疎いので、かえって雇い主にとって気の許せる存在だ。



この作品を読んだら誰もが「ああ、猫村さんが家にきてくれたら」と夢想するに違いなく、老若男女を魅了して大ベストセラーとなった。

働き手の減少と共に女性の社会進出が叫ばれるなか、仕事・家事・育児の一極集中による女性の負担は「ワンオペ」と揶揄され、少子化の進む日本の社会問題になりつつある。介護分野の人手不足も深刻で、世界中のどこの国よりも早く高齢化社会をむかえた日本はまさに「猫の手でも借りたい」ぐらい切迫した状況とっていい。

今年になって日本政府は、外国人に対して新たな在留資格を新設することで、移民によって農業や介護現場に対応していく方針を固めた（出入国管理及び難民認定法に関する改正案）。これまでの「技能実習」という実質を伴わない制度に比べて日本の移民政策は大きく進歩したといえるが、またこれによって様々な問題も予想される。

台湾のリアルな「お手伝いさん事情」とは

筆者が暮らしている台湾も、日本を上回るスピードで高齢化が進んでおり、家事や介護の分野でも早くから外国人労働者の手を借りている。台湾政府によると、現在は25万人以上の外国人労働者が家事や介護に携わっているそうで、人口2350万人の台湾ではかなり高い割合だ。不法滞在や偽装結婚など裏のルートもあるので、実際の人数は更に多いだろう。当然ながらトラブルも少なくないが、概してメリットの方が大きいから、これだけ数が増えたといえる。こうした台湾でのお手伝いさん事情を、身近な例から紹介したい。



台湾の介護社会において外国人労働者は欠かすことの出来ない存在。街中や交通機関、公園などあちこちで見かけることが出来る（写真：筆者提供）

女性の社会進出が進んでいる東アジアの多くの都市で、外国人労働者のお手伝いさんが受け入れられているが、周囲をみる限りでは、住環境が劣悪といわれるシンガポールや香港に比べ、台湾は比較的マシな労働環境ではないかと思われる。実際、自宅介護などで公的な機関に雇い入れを申請する際に、お手伝いさん用の個室があるかどうかもチェックされ、契約の際にも休日や労働時間について話し合われる（そうではないブラックな雇い主も勿論いる）。

筆者が直接に交流をもった外国人労働者の女性はこれまで15人ほどいるが、その中の多くがインドネシア人女性、続いてフィリピン人女性だった。



近年台湾に働きに来ているのは、東南アジアからのムスリムの人が多い（写真：筆者提供）

筆者の以前の職場でお手伝いさん及び高齢者の介護をしていたフィリピン人女性は、大卒で教員免許も持っていると言っていた。フィリピンでは、こうした高学歴の女性でも海外に家事・介護労働で働きに出ている例が多い。英語と中国語を流暢に操り、頭がよくて働きぶりも真面目だったので、相場より高い給与をもらい、故郷が台風による水害で大変だった時も、雇い主である社長が見舞金や飛行機代を出すなど、かなり大事にされていた。

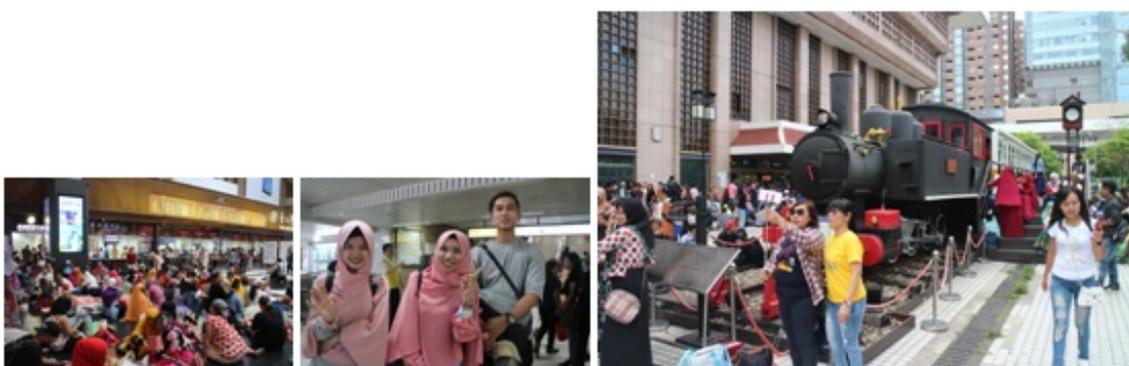
「貧しさゆえに仕方なく働かされている」は勝手な思い込み

外国人お手伝いさんを、家族同然に大切にできる家庭は少なくない。働きぶりがよく能力のあるお手伝いさんは引く手あまたなので、出ていかれると困るという事情もある。相性の良いお手伝いさんにめぐり合うのは大変なことで、15人以上とつかえひっかえして、結局は雇う事自体を諦めてしまった台湾人マダムもいる。

実際、筆者も事情があつてお手伝いさんと暮らした事があるが、1人目は2週間でふらりと居なくなり、2人目・3人目も一か月ずつで辞めて、別の職場へ行ってしまった。筆者としては、思いやりをもって対応したつもりだけにショックだったが、当初自分が彼女たちに対して抱いていた「貧しさゆえに故郷の夫や子と引き離され、仕方なく働かされている」ようなイメージが、じつは他者への尊重をはき違えた勝手な思い込みに過ぎず、そうした同情や憐みは逆に失礼だと思知らされた。

我が家に来た2人目のインドネシア人女性は、国に夫と小さな子供がいたが、台湾にもインドネシア人の彼氏がいて、毎晩9時頃に仕事を終えた後はベランダで小一時間ほど電話で彼氏と喋るのを日課にしていた。また毎週末の休日には、インドネシアの人々が集まる郊外のダンスホールへ出かけていった。

大抵、どの女性もお洒落に関心を持っていて、露天で流行の洋服を買うのを楽しんでいた。日々アイロンがけしたり、高齢者の車いすを押しながらハンズフリーの携帯電話で仲間と喋り、色んな情報交換をしながらより良い労働環境を手にしていく彼女たち。物心がついたら何となく結婚して早く子供を産むのが一般的な封建的な田舎で育った女性達にとって、台湾に来て働くことは、自由の獲得であり一つの自己実現の形でもあるのだろう。



「一緒に良い社会を作っていく」という意識が大事

台湾にも、制度上の改善の余地はまだまだある。現在の問題は、現場で培われたノウハウが帰国や職場の移動によって引き継がれず、場当たりのようになってしまっていることだ。また今後は中国など他所の給与水準が上がることで台湾離れが進み、新たな人手不足が起きる事も考えられる。そういう意味でこれから、多くの人材受け入れを予定している日本も、どうすれば彼女たちにとって日本が「魅力的な働き場所」となるかを考えることは不可欠だろう。

今や自らの意志で色んな選択ができる彼女たちが、もっと高いレベルで自己実現できるような環境、例えば経験やノウハウの蓄積によって給与が上がったり、キャリアを積んで資格を取得することで家族も一緒に暮らせるような滞在ビザが発給されるなど、来日して働くモチベーションが上がるシステムを整えていく必要がある。そうすることで、仕事上起こりうるトラブルを未然に防ぐことも期待できるし、優れた人材が残っていくことで結果的に日本人社会にとってプラスに繋がっていくとおもう。こうしたことは、家事・介護に携わる人材に限らない。

一世を風靡するような漫画のキャラクターとは、時代の要求の投影でもある。高度経済成長期に求められた原子力政策のなか「鉄腕アトム」が生まれ、平和憲法のもと武力が必要とされる矛盾の中で「ウルトラマン」「巨大ロボット」といった正義の味方が誕生した。現代において「猫村さん」が多くの日本人を魅了するのは、家事・介護労働を担う人材について、日本社会が待ったなしの切実さを抱えている反映だと思えてならない。

かといって、日本人の気質を考えても、すぐさま外国人の「お手伝いさん」に馴染むのは難しいと思われる。幸いお隣の台湾には、そうした外国人労働者問題に関しての経験やノウハウ、社会研究の蓄積がある。そうした台湾の先例に学んで日本に合った制度設計を進めていくと共に、外国人労働者を「働かせる」のではなく、その力を借りて一緒により良い社会を作っていくのだという意識を、日本人はもっと理解していく必要があるように思う。

（筆者紹介）栖来ひかり（台湾在住ライター）

京都市立芸術大学美術学部卒。2006年より台湾在住。日本の各媒体に台湾事情を寄稿している。著書に『在臺灣尋找Y字路／台湾、Y字路さがし』（2017年、玉山社）、『山口、西京都的古城之美』（2018年、幸福文化）がある。個人ブログ：[『台北歳時記～taipei story』](#)

(注) 出所：「WEDGE Infinity」(2018年6月18日掲載)





知られざる日本史——皇太子「台湾行啓」をたどる

片倉 佳史（台湾在住作家）

[nippon.com](http://nippon.com) コラム：2017年12月2日

台湾が日本の統治下に置かれた半世紀。1923年4月、のちに昭和天皇となる皇太子裕仁（ひろひと）親王は摂政の立場で12日間、台湾に滞在した。交通が不便な東海岸や中部山岳地帯には足を伸ばさなかったものの、主要都市をほぼ訪れている。視察先は62カ所にもものぼり、催された祝賀行事は232にも及んでいる。まさに、台湾総督府にとっては空前絶後の一大行事であった。

この台湾行啓が実現したのは第8代台湾総督の田健治郎（でんけんじろう）の時代だった。当初は西欧外遊の帰途に台湾に寄ることが計画されたが、長旅で日程の調整も難しいということから帰国後、改めて議論された。

そして、4月5日に出発することが一度は決まったものの、フランス留学中の北白川宮成久（なるひさ）王が4月1日に自動車事故に遭い、パリで死去するという事件が起こった。これを受けて皇太子の台湾行啓は延期となった。

結局、4月12日に皇太子はお召し艦「金剛」で横須賀を出発し、16日に基隆に入港した。

## ◆台湾の主要都市を巡る

一行が上陸したのは午後1時25分だった。基隆港駅前棧橋では台湾総督府鉄道部長の新元鹿之助が出迎えた。一行はそのまま駅に進み、この日のために仕立てられた特別列車に乗り込んだ。

台北駅に到着したのは午後2時20分。海軍軍楽隊が君が代を演奏し、一行を出迎えた。駅前は清められ、特設の奉迎門が設けられた。沿道は奉迎の団体や一般市民で埋め尽くされ、この日だけで10万もの人が出迎えに上がったとされる。この頃の台北市の人口は17万人程度とされるので、この数字がいかに大きなものかが理解できる。

台北での宿泊所となったのは台湾総督官邸だった。現在は 台北賓館の名で迎賓館として使用されている。ここは台湾政府から歴史遺産の指定を受けており、年に数回の一般公開日が設けられている。



台北賓館

注目したいのは、敷地内の庭園に亜熱帯性植物が選ばれ、植樹されていたことである。これはマラリアをはじめとする疫病がまん延していた時代、要人が地方都市に赴かなくても、台湾らしい南国風情を楽しめるようにという配慮だった。

一行は2日間の台北市内視察の後、台中へと向かっている。列車には台湾総督の田健治郎が同行し、途中、桃園台地を通過の際、農業用水路とため池についての説明をしている。ちなみに、桃園台地は世界でも有数のため池密集地で、台湾行啓は桃園大[土川]（農業用水路）の工事のさなかだったこともあり、解説にも力が入ったと推測される。なお、このため池群は現在も数多く見られ、台湾高速鉄路の車窓から眺められる他、台湾桃園国際空港に離着陸する際にも眼下に確認できる。

下車駅となったのは新竹駅で、1913年に完成した駅舎（右写真）に降りたっている。この駅舎は直線を多用したドイツ風バロックと呼ばれるスタイルで、基隆、台中と並び、台湾の三大駅舎に挙げられていた。現在もその姿を保ち、東京駅丸の内駅舎と姉妹駅協定を結んでいる。



新竹駅

#### ◆新高山に対し、次高山を命名

新竹を出た一行は台中に向かった。その途中、車中で台湾第二の高峰シルビヤ山の説明を受ける。標高は3886メートル。台湾第一の高峰である新高山（現称・玉山）を明治天皇が命名したことを受け、これを「次高（つぎたか）山」と名付けた。その後、台中に1泊した後に台南を目指している。

途中、嘉義駅通過後には北回帰線標を車窓に眺めている。

台南の宿泊所となったのは台南州知事官邸だった。皇太子宿泊所が現存するのは台北と台南だけで、史跡の指定を受けている。館内の見学も可能で、古写真やパネル展示がある。市民の関心は高く、台南市内の行啓地点を紹介したパンフレットが用意され、そのコースを巡る旅が人気を集めている。

高雄市内を21日に視察し、翌22日は屏東にある台湾製糖株式会社の工場を訪ねている。ここでは特設休憩所で台湾特産の麻竹に新芽を発見。これは後に「瑞竹」と称揚されるようになった。工場はすでに操業を停止しているが、施設の一部が産業遺産として保存されている。

また、この日は打狗（高雄）山と呼ばれていた丘に登頂し、高雄の町並みと港を眺めている。この視察を記念して後日、打狗山は「寿山」と改名された。ここは現在も高雄を代表する景観スポットとなっており、行楽客でにぎわっている。



高雄市内を視察する様子（高雄州行啓記念写真帖より）

23日は高雄港から澎湖島の馬公へ渡った。海軍の要港部を視察後、船中泊で基隆へ向かい、台北に戻った。

当時の交通事情を考えると、行程はかなり詰まった印象だが、遅れが生じることはほとんどなく、順調に最終日となる27日を迎えた。午前7時10分、皇太子を乗せた特別列車は台北駅を離れ、基隆へと向かった。

#### ◆貴賓車は今も残されている

台湾行啓では特別列車が仕立てられた。列車をけん引したのはE500型蒸気機関車と呼ばれたものである。日本では8620形と呼ばれる形式で、台湾には44両、在籍していた。列車は8両編成で（機関車を含まず）、山岳区間となる苗栗～后里間は最後部に補機を増結して勾配に挑んだ。



車両についても、貴賓車と称されるものが用意された。台湾総督府鉄道部には2両の貴賓車が在籍し、皇太子行啓に合わせて新造された「ホトク1」、そして、台湾総督専用の「コトク1」があった。

両客車ともに日本本土から派遣された技師が設計し、用材には紅ヒノキと米国から輸入された松が用いられた。鋼鉄類についても欧米から輸入されたものだった。

車体は紫色に塗られ、側面に菊の紋章がはめ込まれていた。また、台湾南部での暑さを考慮し、当時としては非常に珍しい扇風機が設置されていた。

皇太子用に新造されたホトク1型は1913年3月に完成した。車体長16・4メートルの木造客車で、客室の他、配膳室と従者の控室があり、トイレは洗面台が壁に埋め込まれたスタイルだった。また、車内には明治の画家・川端玉章の蒔絵（まきえ）が掲げられていた。

台湾総督用のコトク1型は1904年10月に完成した。車体長は13・988メートルで、客室の他、食堂、配膳室、洗面室、化粧室、予備室を備えていた。

現在、この2両の貴賓車は台北郊外の七堵操車場に保存されている。専用の車庫が用意されており、その中に並べられている。一般公開されるのは特別イベントの際に限られるが、公開が決まると、決まって申し込みが殺到する。

車齢100年という長さを考えてみると、この客車が原形を保っているのは奇跡に近いと言えよう。特に台湾総督用のコトク1型客車は110年以上の歴史を誇り、その価値は計り知れないものがある。台湾鐵路管理局はこの2両の客車を歴史遺産として扱い、永遠に守っていく予定だという。

台湾では民主化の進行に伴い、冷静でかつ、客観的な評価の下、日本統治時代の半世紀を捉える動きが定着している。皇太子の台湾行啓もまた、台湾史の一部として認識されており、関心は高い。日本人が知らない日本の歴史。台湾で皇太子の足跡を訪ねてみてはいかがだろうか？

片倉佳史（かたくらよしふみ）

台湾在住作家。1969年神奈川県生まれ。早稲田大学教育学部在学中に初めて台湾を旅行する。大学卒業後は福武書店（現ベネッセ）に就職。1997年より本格的に台湾で生活。以来、台湾の文化や日本との関わりについての執筆や写真撮影を続けている。分野は、地理、歴史、言語、交通、温泉、トレンドなど多岐にわたるが、特に日本時代の遺構や鉄道への造詣が深い。主な著書に、『[古写真が語る台湾日本統治時代の50年 1895—1945](#)』、『台湾に生きている「日本」』（祥伝社）、『台湾に残る日本鉄道遺産—今も息づく日本統治時代の遺構』（交通新聞社）等。オフィシャルサイト：[台湾特搜百貨店](#)。



映画の縁、人の縁～台湾を撮り続けて

酒井充子（映画監督）

【[nippon.com](http://nippon.com)コラム：2018年3月18日】

## ◆良縁に恵まれた台湾での映画製作

年明けに台湾・新北市の蕭錦文（しょう きんぶん）さんに会いに行った。蕭さんは、私が初めて監督した映画『台湾人生』（2009年）の登場人物の一人で、今年4月で92歳。台湾が日本統治下にあった時代に青少年期を過ごした5人に取材したが、今も健在なのは蕭さん一人となった。初めて会ったのは07年。映画完成のめども立たないまま台湾取材を続ける中、娘を心配する両親を誘った台湾旅行でのこと。総統府の見学コースを案内してくれたのが蕭さんだった。この偶然の出会いをきっかけに話を聞かせてもらうようになった。

蕭さんは第二次世界大戦でインパール作戦に従軍した元日本兵で、戦後、27歳のときに一つ年下の弟を白色テロで亡くしている。私は日本人として知っておかねばならないことの多くを、台湾のおじいちゃん、おばあちゃんたちに教えてもらってきたが、蕭さんの人生には、戦前の日本がしてきたこと、戦後の日本がしてこなかったことが凝縮されている。

今年1月、拙著『台湾人生』が文庫化された。蕭さんのところへ行ったのはその報告も兼ねてのことだった。映画公開から9年。単行本刊行から8年。東日本大震災の際、多額の義援金が寄せられたことを経て、以前よりずっと台湾が近くなった今だからこそ、読んでいただきたいとの思いがある。私自身はこれまでに台湾を舞台にしたドキュメンタリー映画を4本作ってきたが、さまざまな縁に恵まれてここまで来た。その歩みを振り返りたい。

## ◆台湾映画と台湾のおじいさんとの出会いから始まった映画人生

私の映画人生は、1本の台湾映画と一人の台湾人のおじいさんとの出会いから始まった。初めて台湾を訪れたのは1998年夏のことだった。きっかけは蔡明亮（ツァイ・ミン・リャン）監督の映画『愛情萬歳』。台北で暮らす男女3人の若者の孤独を描いた作品で、当時登場人物たちと同世代の20代後半だった私は大いに共感するとともに、スクリーンを通して伝わってきた街のざわめきをじかに感じてみたいと思った。

当時、新聞記者として函館にいた。同年3月に台北との間にチャーター便が就航したばかりで、台

台湾からの観光客が劇的に増えていたこと、前年に函館の国際交流センターのホームステイプログラムで台湾からの留学生を受け入れていたことも、台湾を身近に感じる誘因になっていたかもしれない。そんなこんなで、どうしても映画の舞台である台北に行ってみたく思ったのだ。

ロケ地を訪ねるといふ無邪気な一人旅だった。『愛情萬歳』のラストシーンで主人公が号泣する公園のベンチに座ってみたり、初めての屋台ではしごしたり。そうだ、せっかくだから学生時代に見た『悲情城市』（侯孝賢（ホウ・シャオ・シェン）監督）の九[イ分]にも行こう。かつて金鉢で栄えた街をひとしきり歩き、台北に戻るバスを待っていたときに流ちょうな日本語で話し掛けられた。「日本からですか?」。70代ぐらいの小柄な男性だった。バス停にいるわたしが日本人だと分かり、近くの家からわざわざ出てきたという。公学校（小学校）時代にかわいがってくれた日本人の先生に今でも会いたいと話してくれたが、バスがやってきて話の途中で別れてしまった。

最後までゆっくり話を聞かなかったことがずっと心残りで、2年後にそのおじいさんを探しに行ったが会うことはできなかった。戦後50年以上たつてなお、恩師を思う人が台湾にいることを初めて知り、自分の無知を恥じるとともに、日本統治下で暮らした人々の思いを知りたい、伝えたいと思った。振り返るとあの出会いからもう20年になる。今では日本語を話す世代が高齢化し、街なかで話し掛けられるということはほとんどなくなった。

#### ◆函館で出会った映画人の影響から、映画製作の世界に入る

映画で台湾を伝えようと思うようになったのは、函館で出会った映画人たちの影響だった。現在の函館港イルミネーション映画祭の前身となる映画祭が毎年行われており、取材を通して映画祭に集う監督やプロデューサーの話を聞くうち、映画が見るだけのものから作る対象へと変わっていった。映画に挑戦したいという気持ちが日増しに強くなった。

2000年春、30歳で新聞社を辞めて映画の世界に入った。その年の夏、函館の映画祭主催のワークショップでドキュメンタリー映画の小林茂監督と出会ったのを機に、重症心身障害児（者）施設を追った『わたしの季節』（04年）に取材スタッフとして参加することになった。02年、この現場で撮影助手だった松根広隆氏と出会う。彼は日本映画学校の卒業制作作品でいきなり劇場デビューした大先輩なのだが、同い年の気安さもあり、「将来、台湾を撮るから、そのときはよろしく」と声を掛けた。その5年後、『台湾人生』の撮影で台湾を一緒に走り回っていた。以後、最新作『台湾萬歳』まで全ての作品で撮影してくれている。

映画の宣伝や撮影現場の仕事が一つ終わる度に台湾へ飛んだ。週末や旧正月などの連休のときは電車の座席が全く取れない。駅の窓口で「無座」と書かれた切符を渡されてがっかり。初めのうちはスーツケースや床に敷いた新聞紙に座ったが、車窓を流れる濃い緑や青い空、白い雲たちが気分をなごませてくれた。そのうち、空いている席に滑り込むすべを身に付けた。そうやって台湾を何周しただろう。下車して駅前のお店に入っていく。「日本語を話せる人いませんか?」と日本語で尋ねると、本人は話せなくても、必ず家族や近所に日本語を話すお年寄りがいて、そういう人を引っ張ってきて

くれた。

取材を始めたころ、あるお宅にお邪魔したら、いきなり「ごはん食べましたか？」と聞かれ、反射的に「いえ、まだです」と答えてしまった。結果、おいしい手作りの水ギョーザをごちそうになることに。赤面。台湾初心者の方さま、「ごはん食べましたか？」は台湾語で「ジャパーボエ」通常「お元気ですか？」というあいさつの意味で使われます。ただのあいさつなので、くれぐれも「まだです」などとやぼな返事はなさらぬようお気を付けください。

#### ◆私がやめたら彼らの声が届かなくなる

本格的に台湾取材を始めて6年目の2007年春、文化庁の助成金を得ることが決まり、資金のめどが立ったわけだが、それまではただひたすら台湾へ通い、人に会って話を聞くという作業を一人で続けた。途中何度も諦めかけた。それでも最後まで続けられたのは、ひとえに取材を受けてくれた人たちへの責任感だった。日本人の自分が日本語で尋ね、日本語で答えてもらう。その条件の中だからこそ、出てきた言葉があったはずだ。私がやめてしまえば、彼らの声は誰にも届かなくなってしまう。ただその一点だった。

映画、特にドキュメンタリーでは、撮影、編集などほとんど全てを一人でこなしてしまう監督がいるが、私にそんな才能はない。優秀なスタッフの力をいかに作品に結集させるかが私の役目だ。撮影した素材を編集し、最後に音の仕上げをする。音楽も最後の段階で付ける。ギタリストの廣木光一氏とは、氏が『わたしの季節』の音楽チームに参加していた縁で知り合った。『台湾人生』の音楽をお願いするとき私が伝えたのは、「ギター1本で、台湾への愛を込めて」ということだけだった。見事に応えてくれたことは、映画が証明している。

ところで、函館の新聞記者時代にホームステイで受け入れた留学生の黄碧君（ファン・ビ・ジュン）氏とは2010年、『台湾人生』の上映会に彼女が駆け付けてくれて13年ぶりに再会を果たし、今も交流を続けている。彼女は翻訳家として「舟を編む」（三浦しをん著）を手掛けるなど活躍中で、日本人の夫と東京で暮らしている。

冒頭の蕭さんに戻ろう。2年前に自宅で転倒して腰の骨を折り、つえなしでは生活できなくなった。外出するときは車椅子を押しながらゆっくり歩く。近くのレストランに案内してくれる道すがら、「そろそろかえる準備をしなくちゃ」と言う。台湾のこの世代は日本語で話すとき、あの世へ行くことを「かえる」と表現する。「まだまだお元気ですよ」と返しながらも、蕭さんの年齢を考える。あとどれだけのものを彼から学ぶことができるだろうか。

映画には人を動かす力がある。人との出会いもまたしかり。私の場合はそれが台湾とつながった。皆さんはこれまでどんな映画と、人と出会ってきましたか。そしてこれから、どんな出会いをするのでしょうか。

酒井 充子（さかい・あつこ）

山口県周南市生まれ。慶応義塾大学法学部政治学科卒。メーカー勤務、新聞記者を経て2009年、台湾の日本語世代に取材した初監督作品『台湾人生』公開。ほかに『空を拓くー建築家・郭茂林という男』（13）、『台湾アイデンティティー』（13）、『ふたつの祖国、ひとつの愛ーイ・ジュンソプの妻ー』（14）、『台湾萬歳』（17）、著書に「台湾人生」（光文社）がある。「いつ日本に帰化したんですか？」とよく聞かれる。故郷と台湾の懸け橋となるべく奮闘中。

「本物の李登輝の言葉」を届けたい

早川友久（李登輝 元台湾総統 秘書）

「台湾民主化の父」とも呼ばれ、長らく総統をつとめた李登輝にどういったイメージを持たれているだろうか？ 私は、学生時代、ふとしたきっかけで初めて台湾に興味を持った。当時は、早稲田大学の学生。その後、金美齡の秘書を経て、台湾大学に留学。そして2012年から、李登輝元総統の秘書として働き始めた。これも偶然の出来事なのか、はたまた運命なのか。着任してから、かれこれ7年が経過しようとしている。私が李登輝と日々、業務で、プライベートでお付き合いしている語り合いの言葉の中から、李登輝が今、伝えたい言葉の真意を私なりに汲み取って、みなさんにお届けしたい。



李登輝元総統に「日本人秘書」が必要なワケ

秘書の仕事、といっても一言で説明するのは難しい。メールや手紙の返事、スケジュール管理から来客の応対、原稿の草稿づくりから御礼状書き、外交官とのお付き合いまで。訪日すれば身の回りのお世話をすることもある。それこそ「李登輝元総統の対日窓口」としての役割を求められる。

総統は日本からの来客が帰るとよく私に「今日のお話はあんなのでよかったかな」と聞く。常に「李登輝はいま日本人に何を伝えるべきか」を考えているのだ。これは決して人気取りとか、耳ざわりの良いことを言うことではない。台湾にとって日本がなくてはならない存在だからこそ、「日本よ、しっかりしろ」という一念だけで、総統は「日本人に伝えておかなければならないことはなにか」を考えている。

事実、奥様（私はいつも総統夫人をこう呼ぶ）は事あるごとに私に向かって「早川さん、主人はね、台湾の総統までやったくせに、いつだって日本のことを心配してるのよ」と苦笑混じりに話すのである。日本からの来客が、李総統に何を話してもらいたいのか、という時機的なセンスも考えてのうえで日本人秘書を必要としているのだろう。

日々どんな仕事をしているのか

名刺交換などをするとよく「いつもどんな仕事をしているんですか」と聞かれることがある。実際、細々とした事務処理をすることも多く、答えとしては「秘書業務です」としか言いようがないのであるが、それではあまりに抽象的だ。そこで、李総統の日本語秘書がどんな仕事をしているのか、ある一日をご紹介します。

私は毎朝、基本的には淡水の李登輝事務所に出勤するのだが、直行することは少ない。政治家の秘書と聞くと、朝が早いイメージがあるだろう。たとえ退任した総統であろうと変わらないと思うのだが、実際、朝はそれほど早くはない。これは李総統の生活スタイルとも関連している。総統夫妻は宵っ張りなのだ。夜は読書やテレビを見ることで過ごし、就寝は午前1時、2時というのはザラ。しぜん、起きるのはゆっくりめとなる。

だからこそ、この朝の時間は、私にとって多方面の関係者とのコミュニケーション作りの時間に当てることが多い。人間関係を維持していくには一緒に飲みに行くのがベストだが、そうそう毎晩飲み歩いてもらえないので、この「朝まわり」は情報交換と人間関係のパイプの維持に有益なのだ。李登輝が知りたいこと、李登輝が発する言葉を理解するための情報収集ともいえよう。

例えば、特に用向きがなくとも、日本の新聞社の台北支局や、国交がない台湾において大使館の役割を果たす「交流協会台北事務所」に出向く。コーヒーの一杯もごちそうになりながら、世間話に興ずる。あまり無駄話をすると、朝の忙しい時間に相手にも迷惑なので、短時間で切り上げるが、それによって時には情報を得ることもあるし、顔つなぎにもなる。今頃だと、今月下旬に予定されている沖縄訪問についての打ち合わせに台湾外交部や航空会社を訪問することも多い。

午前10時ごろには事務所に出勤する。そこではメール、手紙、FAXの処理である。FAXは時代の流れか最近めっきり減ったが、親しくなればFacebookやLINEで繋がり、それを通じて仕事上の連絡をしてくる人もいる。どの手段にせよ、毎日少なくとも数回の連絡が来るが、内容は様々である。

今日のメールボックスを見ると、沖縄訪問についての事務連絡、インタビューや原稿の依頼、表敬訪問の日時調整、御礼のメール、原稿料の振込先口座の確認、来春の出版を目指す書籍の章立てに関する打ち合わせ、等だ。御礼状や書籍の贈呈は毎日のように届く。これらを、まずは総統に報告するもの、しなくともよいもの、つまり私が処理することで足りるものに分けるのも私の仕事だ。

ちなみに総統に報告するものについては、記録を残すためにもすべて公文でのやり取りとなる。それぞれについて簡潔に公文を起こし報告する。例えば、「日本のなんとか新聞から、何月何日に最近の日台関係についてインタビューしたい、という依頼がありますが如何しますか」といった具合だ。それに対し、総統が「可」とサインすれば裁可が下りたことになり、総統の判断を仰いだ、という手続きを踏んだことになる。

私自身で処理できるものは返信し、御礼状や贈呈された書籍への返事を書き終わる頃には、総統の自宅から前日に報告した公文が戻ってくる。私が報告した内容について、総統がそれぞれ判断するわけだが、その内容についても相手方に連絡しなければならない。「総統は喜んでインタビューをお受けします。ついては、○月○日、何時から総統ご自宅にてお願いします。詳細は追ってご連絡します」といった具合である。こんなやり取りをしている間に、もはやお昼の時間である。

相手にとって台湾訪問がよいものになるよう心を尽くす

この日は、午後3時から、日本からの総統への表敬訪問があったため、ランチもそこそこに総統の自宅へ向かう。前もって忘れてならないのは、当日の名簿と簡単な挨拶原稿だ。総統は来客前、必ず名簿をじっくりと見て、名前と肩書を頭に叩き込む。その際には「2004年末の訪日の際にお世話になった。前回お会いしたのは2年前。現在は社長をリタイヤされ相談役」などといった情報を付け加える。こうすることで、来客の周辺情報がインプットされ、メモを見ずとも「こないだお会いしたのは2年前じゃなかったかな」と総統の口からスラスラと出てくるようになる。それによって場が和んで話が弾むことにも繋がるのだ。



訪問客に関するレクチャーは重要な仕事のひとつ（写真：筆者提供）

それ以外にも、事前に来客の秘書とやり取りしたなかでヒアリングした「宿泊はどこか、台湾滞在は何日間か、その他の大まかな予定は」などといった内容を報告しておくことも多い。というのも、総統は常々「どこに泊まってるんだ？食事はうまいか」とか「果物は食べたか。今ちょうどマンゴーが出てきたから食べなさい。あとで届けさせるから」などと、ただ自分を訪問してくれたときだけでなく、相手が台湾に滞在する時間すべてに関心を抱き、台湾訪問が良いものになるよう気を配っているのだ。

李総統が「稀代の人たらし」と言われる所以

この日の表敬訪問は1時間半ほど、午後4時半には終わった。今日のお客様も大変喜んでお帰りになった。この表敬訪問が、ときにはかたちを変えて晚餐会にご招待いただくことになる場合もある。

午後5時近くには、ちょうど奥様も外出から戻られた。4月に生まれたひ孫に会いに行ってきた

のだ。「やっぱりベビーがいると張り合いが出るわ」とひいおばあちゃんは喜びを隠せない。

ついさっきまで総統は「中国の『一带一路』に日本と台湾はいかに対抗するべきか」などと獅子吼していたと思ったら、ひ孫の写真を出して来て「どうだ。かわいいだろう」などとやる。元総統にして日本と台湾を心から憂い、95歳にあっても常々「日台関係をどう前進させるべきか」を語る一方で、ひ孫自慢を臆面もなく見せる。誰だか忘れてしまったのだが、何かの評伝で李総統が「稀代の『人たらし』」と評されていた。この落差にとてつもなく人間味を感じるのは日頃、そばにいる私だけではないということだ。

この日はそのあと、日本のメディアと会食することになっていた。もともとは2人での食事だったのだが、ちょうど日本から来ている大学教授も連れて来るといふ。であるなら、私の台湾大学での恩師も同じく国際法が専門なので声をかけ、二次会で合流することになった。いつの間にか二人の約束が、二次会では10人近くに増えていた。日本よりゆるやかな空気の流れる台湾ならではの光景だが、台湾で過ごして10数年、こうして人の輪が少しずつ広がっていく。

「本物の李登輝の言葉」を届けたい

私が李登輝に仕えることになったのも、ひとつのご縁だった。そのご縁がどんなものだったかは追々お伝えしていきたいが、幸福にも李登輝の生の言葉を毎日のように聞くことができるようになった。この幸運を自分だけで独り占めするのはあまりにももったいない。また、李登輝の言葉の真意が誤解されて伝わっていることもある。「本物の李登輝の言葉」を皆さんと分け合うことが、私のもうひとつの仕事だと思っている。

早川友久（はやかわ ともひさ）

李登輝元台湾総統秘書、1977年栃木県足利市生まれで現在台北市在住。早稲田大学人間科学部卒業。大学卒業後は金美齡事務所の秘書として活動。その後、台湾大学法律系（法学部）へ留学。台湾大学在学中に3度の李登輝訪日団スタッフを務めるなどして、メディア対応や撮影スタッフとして、李登輝チームの一員として活動。2012年から李登輝より指名を受け李登輝事務所の秘書として働く。

（注） 出所：「WEDGE Infinity」（2018年6月14日掲載）



# 檳榔（ピンロウ）おじさんが語る「日台友好」の心

台南で3千人の日本人をもてなした檳榔（ピンロウ）おじさんが語る「日台友好」の心

マルヤン [2017.10.07]

檳榔文化に興味津々の日本人

檳榔店は私の父が立ち上げ、私が引き継いだ。開業から今日まで52年。台湾でもB級文化として扱われている檳榔だが、かつて中央研究院歴史研究所が3か月にわたる「檳榔文化特別展」を開催し、長い歴史を持つ文化として紹介したことがあった。

そもそも不真面目な業者が羊頭狗肉（ようとうくにく）で檳榔を売りさばいたため、真面目な業者も汚名を着せられ長くマイナスのレッテルを貼られていた。2年前に出会った作家の一青妙さん（写真左、右は本人）は、そんな台湾の檳榔文化や経営に興味があったのかもしれない。著書『私の台南』で台南独特の人情味あふれた店舗を記録し、日本人に紹介したのだった。



しかし、それが私のその後の人生を変えてしまうとは、彼女は万に一つも想像しなかったのではないだろうか。

ある時、普段通り仕事をしていると、片手に『私の台南』を持った若者が近づいてきて、店内で仕事をしている私をじろじろ見つめながら、「マルヤンさん、こんばんは！」と話しかけてきたのだ。その瞬間から、私と日本人観光客の交流が始まった。

しかし、「ありがとう」「さよなら」しか日本語を知らない私は、日本人の横で薄ら笑いをするほかなかった。妹がたどたどしい日本語と漢字の筆談、それに少しの英語で交流し、たまに訳してもらって少しずつお互いの距離を縮めていった。私の店にとって初めての外国人客はこうして迎えたのだった。

大丈夫は「だいじょうぶ」にあらす

時がたつにつれ、日本人観光客もどんどん台南にやってきて、一組また一組と私の店を訪れた。気が付けば3000人を超えて

いた。私と家族の役割はこうだ。彼らの貴重な時間の節約のため、スポットを一つでも多く回り、一つでも多くのご当地グルメを堪能できるように案内することだった。そして、いつしか「ありがとう」「さよなら」しか言えなかった日本語が、15個も言えるようになった。遠来の客をもてなすために「実戦」で鍛え上げたものだが、たまに意図がうまく伝わらず笑い話になったり、緊張し過ぎて背中が汗でびっしょりになったりすることもあった。

例えばある時、飲み物を「おごる」と伝えようとしたところ、発音が悪くて「おこる」と聞こえたようで、彼らを困惑させたようだった。私も訳が分からなかったが、後で日本語の達人に教えてもらい、ようやく事態を理解した。しかし、時すでに遅し。一行はすでに帰国してしまった。

ところで、日本人は礼儀正しさに有名な民族だ。特に感謝を表すのには、いくつもの言い方がある。長い文ほど丁寧な言い方で、中には11音の長さに達するものあって、日本語初心者の私にとっては、ただただ驚きしかなかった。例えば食事の時、日本人は箸を持った途端、「いただきます」と言って食べ始めた。初めて耳にする言葉に私は意味が分からず、思わず箸を止めた。何のことはない。日本人のテーブルマナーだった。

また、日本人の友人が多くなれば多くなるほど、いろいろなことも起こった。ある日、台南武廟（びょう）に一行を連れて行った際、参拝方法などを簡単な日本語とジェスチャーで解説した。右から入って左から出るべきところを、日本の友人らは逆から出入りしたのだった。そうではないと身ぶり手ぶりで説明したが、彼が入り口の「大丈夫」と書かれた扁額を指して「だいじょうぶ」と読み上げるので、いやいやそれは中国語で「男の中の男」を意味するんだと解説するはめになり、思わず泣きたくなったものだ。

もちろん、感動的な話もある。台南で大地震が起こった際、市内の維冠ビルが倒壊し、世界中にそれが伝わった。私のフェイスブックにも多くの友人が安否の確認メッセージを寄せた。私は一つ一つに自分は大丈夫であること、台南の大部分では無事であることを伝え続けた。すると2日後、店にずっしりと重い小包が届いた。封を開けると、中にはたくさんの電池が入っていた。被災地に届けてほしいと、日本から送ってきたのだ。感動、感動、また感動である。また、日本の駅前広場では、寒さに負けず台南への募金活動が行われていたことも知った。映像で何人ものおじさん、おばさんが募金している姿を見て、冬にも関わらず、何だかポカポカしてきたものだ。

日本人の友人が増えたことで、年明けにはいろいろな形の年賀状が届くようになった。通常一枚紙のはがきから立体的になるカードまで、全部がくじ付きではないけれど、何気ない日常に温かさや刺激をくれた。生まれてこのかた、こんな気持ちになったことはなかった。みなさん、本当にありが

とう。文章にするとあっけないけど、一つ一つ心に残っている。

## 台湾と日本の文化の違い

忙しく訪問客を迎えていると、全然知らなかった日本という国について、少しだけ知識も付いてくる。何百人もの友人と何千人ものフェイスブック友達とつながっている檳榔店だ。俗に「秀才は門を出でずして、ことごとく天下のことを知る」と言うが、私は国を出ずして日本の出来事を知ることができるようになった。これも全て日本の友人のおかげだ。こんなみすぼらしい檳榔店の、日本語を15フレーズしか話せないおじさんを訪ねて来てくれたからだ。感謝、感謝である。

実のところ、私は日本人が台湾に旅行に来ることに内心、疑問を感じていた。多くの日本人の友人は中国語ができない。英語も簡単な会話しかできない。私なら知らない国に一人旅なんて、怖くてしない。

私は外国に行ったことがない。そのため、何で観光客はそんなにも勇気があるのか、理解できなかった。彼らに対してただただ、サムズアップ、「すごい！」である、ところが、臭豆腐や魚のもつ炒めなど、香ばしくておいしい料理がなぜか食べられない。刺し身が食べられるのに、なぜかもつや豚レバーや鶏はつが食べられない。想像しただけでよだれが滴る豚足を食べられないのはなぜか。これらの多くの疑問は、今も分からないままだ。

## 歴史観光の新たなステージへ

日本人観光客が好きな台南の観光スポットをまとめると、名勝遺跡と台南グルメの他に、縁結びの月下老人の廟にも多くの若い男女が必ず訪れる。女性が恥ずかしそうに尋ねて来たことがあった。私も彼女らの願いがかなったらと心から願う。また、烏山頭ダムや[飛虎將軍廟](#)を訪れることも多い。台湾と日本の過去の歴史が原因だろうか。血縁も地縁も関係ないのに、訪問客はいつも「八田與一」先生の銅像にお花や果物をささげる。自身はたばこを吸わないのに、日本からたばこを持ってきて「杉浦茂峰」将軍にささげることもある。これらは地元の台南人には理解できない行為だが、神様のご加護があらんことを願っている。

これまで、日本から台湾を訪れる旅行客は今日ほど多くなかった。台湾すら知らない状況の中、東日本大震災に対する台湾からの支援で多くの日本の友人らが「台湾」を再認識した。もっと台湾のことを知ろうと、興味を持ち始め、多くの方が観光で訪れるようになった。これは一種の国民外交ではな

いだろうか。台湾人である私も、この盛り上がりには貢献できればと思っている。『私の台南』を読んで、乱雑な私の店舗にやってきて、私とおしゃべりをしてくれる人々と、私なりの方法で台湾と日本との友好に力添えしたいと思う。

おかげさまで私の日常も楽しいものになった。本を読んだ方は、私を外見だけで判断して店に来ることをやめたりしない。この変なおじさん（実はおじさんというほど年をとっていない）と一緒に写真を撮って、あいさつをして、身ぶり手ぶりでコミュニケーションを取って、互いにフェイスブックでも友達になる。驚きと喜びの連続で、本当に毎日が刺激的で楽しい。まるで私の心を試しているようだ。

台湾を愛してやまない日本の友人たちにとって、台湾グルメが彼らを引き付けるのか、それとも台南人の人情味なのか——考えてみたものの、やっぱり答えは出ない。それならどんな方法でも試してみよう、誤解があっても面の皮の厚さで乗り切って笑い話にしまえばいい。「お客さまは神様」の精神で、毎日遠方からやって来る友人たちを迎えたい。リピーターであろうが初めてであろうが、とことん心を込めたもてなしをしようと思う。檳榔店にやって来た全ての人々に、檳榔だけにとどまらない何かを感じてもらいたい。

[マルヤン](#) YANG Maru : 1965年台湾台南市生まれ。1999年に父が起こした檳榔店を引き継ぎ2代目店長になる。台湾で唯一本も売る檳榔店で、日本人観光客がもっとも訪れる檳榔店でもある。今までに3000人以上の日本人観光客を受け入れ、同時にアマチュアのご当地文化ガイドも兼任している。

(注) 出所 : nippon com コラム (2017/10/07掲載)

日本の番組が台湾に上陸してはや半世紀以上、さまざまな番組が日本ドラマ世代を作った。

### 日本ドラマで癒やされた人生

私がまだ幼かったころ、父と母から自分たちが20歳ごろの話をいつも聞かされていた。勤めていた台南市街地の紡績工場で、給料が出ると「宮古座」か「世界館」に行つて映画を見たそう。そのころの台南市街地には劇場が多く、映画以外では台湾の伝統歌芝居である歌仔戯（かざいぎ）の上演もあった。父によると、台湾で戦後に初めて公開された映画は「青い山脈」で、その次は「流星」だった。「宮本武蔵」には、台湾全島がことさら熱狂した。このヒット作にある硫酸を浴びせるシーンをまねする事件が発生したので、上映禁止になったこともあった。

終戦に伴い、台湾は「昭和」を離れて「（中華）民国」の世になった。初代総統の蔣介石は日本人に対して「徳をもって怨に報いる」という「徳政」を強調した。かつては敵対国であったが、戦後も日本との関係は良かった。私の父母は終戦時、まだ小学生だった。青春時代を迎えた2人は恋をして、一緒に日本映画を楽しんだ。台湾で初めて誕生したテレビ局には日本のフジテレビの資本が入っていたのだろうか、フジテレビの新技术と特殊撮影を紹介する番組があった。家族全員がテレビにかじり付き、「へええ〜」と驚嘆の声を上げたことを覚えている。1972年になり、台湾と日本は正式の外交関係を断絶してしまった。それ以来、大人たちは「田中角栄」の名が出るだけで、とても憤慨するようになった。

### 街頭の貸しビデオ店における日本ドラマ時代

国交断絶後は、日本を恨む「愛国作品」が台湾映画界の主流になった。この時期には日本絡みの文化の多くが禁止された。日本映画の上映もできなくなった。ところが、日本の歌はかえって盛んにカバーされるようになった。政府の禁令の結果として皮肉にも、著作権概念に政府の管理が及ばない穴が開いてしまったわけだ。1970年代初頭からの十数年間は、著作を無視して日本のテレビドラマやバラエティー番組に中国語字幕を付けたビデオが、貸しビデオ店の1番の人気作品になった。私の家では毎週のように貸しビデオ店に足を運び、最新の「8時だヨ!全員集合」、さらに「日曜劇場」や「火曜劇場」の刑事ドラマのビデオを懸命に探して借りてきた。今でも警察のコートを着た男性がこちらを振り返る冒頭のシーンや、テーマ音楽の旋律までも覚えている。

72年の日華断交から88年の台湾での戒厳令解除まで、当局は日本のドラマや流行曲の流入を禁じていた。ところが台湾のエンターテインメント界ではかえって、重度のコピー現象が発生した。バラエティー番組中のコントはこぞって「8時だヨ!全員集合」のハイライト場面をコピーした。歌謡界でも「松田聖子」や「中森明菜」をコピーした歌手や曲が登場した。夜市（夜の屋台街）では海賊版のテープを買うことができた。日本のオリコンランキングに登場した有名曲は、ほとんど全てそろっていた。

90年代になると、20歳から30歳にかけての人が貸しビデオ店を通して日本ドラマに触れるようになった。彼らは当時、人気の頂点にあった「浅野温子」「浅野ゆう子」「加勢大周」「柳葉敏郎」「石田純一」「吉田栄作」を知ることになった。台湾では連続ドラマが全30話もあるのに対して、日本のドラマは10話から13話とテンポが速い。これも、日本ドラマファンの作品への思い入れを強めることにつながった。「東京ラブストーリー」や「101回目のプロポーズ」は台湾のテレビ局が正規に日本ドラマを放送する前に、貸しビデオ店で大人気作品になっていた。ただし、貸しビデオのテープの品質は悪かった。何度もコピーを重ねた結果、ビデオの冒頭や最後が部分的に消去されているものも、よくあった。古い「水戸黄門」や「忠臣蔵」などの殺陣シーンが見られなくなっていることもよくあった。

## 私の母は生涯かけての「おしん」ファン

とてつもない旋風を巻き起こしたと言え、日本で1983年に放送された「おしん」だ。超高視聴率の情報は、台湾にも早く伝わっていた。私の母のように戦時中に生まれた世代にとって、このドラマのエピソードの多くは、まさに自らの物語として語る事ができる。台湾側は94年になり、やっと正式に放送権を獲得した。第1回の放送では、毎週金曜日に90分から120分の時間枠で何話分かがまとめて放送された。1カ月ほどして、毎週5日間放送されるようになった。それも、午後8時台のゴールデンタイムだ。「おしん」は台湾で電波を通じて放送された初めての日本ドラマだった。オープニング曲はジュディ・オングが歌う「永遠相信（永遠に信じる）」で、エンディング曲は欧陽菲菲（オーヤン・フィーフィー）が歌う「感恩的心（感謝の心）」だった。この作品は主音声と副音声で日本語か中国語かを選べた。「おしん」はその後二十数年間が経過した現在まで、台湾のケーブルテレビと電波放送で、絶え間なく放送されている。台湾語に吹き替えたバージョンまである。再放送の度に、私の母は、「おしん」の一生をもう一度たどったものだ。年配者を対象とする「おしんのふるさと」を訪ねるツアーは、これまでずっと人気の旅行商品だ。80歳を過ぎた母は、ことあるごとに「おしんの小さいころはこうだった」「おしんの家にも、同じような物があった」と言う。「おしん」に自分の母親の姿を重ねているのだろう。

とにかく「リカとカンチ」になって誕生日を祝いたい

ビデオテープがVCDやDVDに変わり、台北市にある商業施設の光華商場ではいつでも日本ドラマの全集が買えるようになった。しかしその後、テレビ局がライセンスを獲得した日本ドラマがどんどん増えて、海賊版のディスクをこそこそと買う必要もなくなった。レジェンドである「東京ラブストーリー」と「101回目のプロポーズ」は世代のシンボルとなった。だれもが誕生日になれば、ろうそくに火をともしながら、ろうそくの本数ごとに、その歳に出会った人のことを話した。全てが「東京ラブストーリー」に登場する「赤名リカ」が「永尾完治」の誕生日を祝うシーンのまねだった。街でだれかと別かれる時には、「1、2、3」と数えてそれぞれが後ろ向きになる（日本語オリジナル版では「せーの」という掛け声）。「101回目のプロポーズ」のシーンのように車の前に出て、大声で「僕は死にません」と叫ぶ者もいた……。こういった児戯のようなことをしていた。中年以降になってもドラマ談義に花が咲く。「もし、リカとカンチが結婚していても、今はもう離婚しているだろうねえ！」といった具合だ。

世代にとってトップクラスの意義を持つもう一つの作品は「あすなろ白書」だろう。テーマ曲の「TRUE LOVE」は20年を経た今もなお、小田和正の「ラブ・ストーリーは突然に」、CHAGE & ASKAの「SAY YES」とともに日本ドラマの3神曲とされている。この種の澄んだ高みに上る味わいを思い出せば、それは青春が葬られている海の深みに潜ることになる。現実に戻るのが嫌になってしまうような秘密の薬だ。

木村拓哉は日本ドラマの時代の刻印

木村拓哉の日本ドラマは、台湾の日本ドラマファンにとっては、心の歳月の物差しだ。1993年の「あすなろ白書」の黒縁の眼鏡をかけた取手治、96年の「ロングバケーション」のピアニスト、97年の「ラブジェネレーション」では長髪を後ろで結んだ広告会社のスタッフ、98年に中山美穂と共演した謎に包まれた「眠れる森」、99年の「ビューティフルライフ～ふたりでいた日々～」では結末で人々を泣かせた美容師、続いて2001年の「HERO」での久利生公平、07年の「華麗なる一族」の悲劇の主人公である万俣鉄平、そして08年の「CHANGE」の朝倉啓太は、台湾のドラマファンにとって期待する政治家像になった。だが、私にとって忘れがたい作品は木村拓哉と明石家さんまが共演した「空から降る一億の星」だ。しばしば人々の記憶から抜け落ちてしまう作品で、もう15年も経ったので細かい部分の記憶は薄れてしまったが、今も明石家さんまの打って変わった演技を思い出す。

木村拓哉が主演した日本ドラマは再放送を重ねてきた。それはまるで、日本ドラマファンの一人一人にとって、過ぎ去った歳月に刻まれた記憶を取り出すための錠前のようなものでもある。「カンチ」の誕生ケーキを思い出せば、あの年、長い休暇を過ごして、その後は恋をしたのだったと思い出す。そして、久利生公平はテレビショッピングで何を買ったのか、総理大臣になった木村拓哉が官房長官役

の阿部寛にどんな名せりふを言ったのかななども覚えている。  
われわれはこうして、木村拓哉と共に歳を取っていくのだ。

## 大河ドラマと朝の連続テレビ小説の違いが分かった

日本ドラマを見始めてから数年は、NHKの大河ドラマと朝の[連続テレビ小説](#)の違いがどうもよく分からなかった。「『おしん』のような長編ドラマは『大河』のはずだろう！」と思っていた。後になり、そのような区別ではないと分かった。

何年も前のことだが、まだ初級の日本語能力だけに頼り、NHKの国際放送を直接受信した。大河ドラマの古い日本語はとても分かりにくかった。朝ドラに出てくる地方独特の言い回しもそうだ。数年前に福岡を旅行した時に大宰府でハンカチを売る高齢の女性に、大河ドラマと朝ドラには困っていると話した。女性は笑いながら、とても微妙な言い回しで「私だって分かりにくいんですよ」と言ってくれた。たぶん、私を慰めてくれたのだろう！

台湾で中国語字幕付きで放送されてきた大河ドラマのうち、視聴率が好調だった作品を挙げるとすれば、「篤姫」だろう。戦国時代ファン、幕末ファンにとって、大河ドラマを見るのはとても魅力的な啓発であり復習だ。しかし、ドラマについていくのには少々疲れる。人間関係や相関図がやや複雑だからだ。でも何回か見れば、心が引き込まれてしまう。1年分を見終えれば、次の年の日本旅行の計画はほぼ決まったも同然だ。

歴史を押し出す大河ドラマと比べ、人を励まし日常生活を描く朝ドラは、視聴率の面でやや勝っている。おおむね2010年の「ゲゲゲの女房」から、台湾のケーブルチャンネルがNHKの放送直後に朝ドラを放送するようになった。1話は15分で、台湾では1時間分をまとめて放送している。「あまちゃん」は台湾に「接接接（じえじえじえ）」という流行語をもたらした。「マッサン」が放送されると、台湾の日本ドラマファンはウイスキーのことを勉強し始めた。私は「ごちそうさん」を見て大阪が好きになり、「カーネーション」のおかげで大阪府岸和田市にある岸和田商店街を歩いてみたくなった。

## 日本ドラマは魂の友

韓国ドラマ、中国ドラマ、米国ドラマによる包囲戦に直面しても、台湾における日本ドラマは視聴率の面で難攻不落のぶ厚い鉄板と言えるだろう。いったん病みつきになれば、抜け出すのはとても難しい。日本ドラマを見ていると、日本で暮らしているという素晴らしき錯覚に陥ることもあるほどだ。私は今も、1日に2時間、日本ドラマを見ている。ぜいたくな没入であり癒やしの時間でもある。テレビであれ、課金されるインターネットの有料動画を選ぶのであれ、日本ドラマについては、ほとん

どが合法的に鑑賞できる時代になった。日本ドラマは既に、単純な娯楽目的の選択肢ではない。情緒と感情を投入する魂の友、つまりSoulmateだ。ドラマ中の名せりふは人生の座右の銘であり、ストーリーは人生への励みだ。私のような日本ドラマファンは、随分かたくななこだわりに仕上がってしまったのかもしれないが。

米果CHEN Sumi

コラムニスト。台湾台南出身。かつて日本で過ごした経験があり、現在は多くの雑誌で連載を持つ人気コラムニストとして活躍中。日本の小説やドラマ、映画の大ファンでもある。

(注) 出所：nippon comコラム (2018/02/24掲載)

歴史に翻弄（ほんろう）された日台航路——「日本アジア航空」の記憶

2018.03.31岡野 翔太

日本と台湾を行き来する方は、普段、どの航空会社を利用するだろうか。今は、日本航空（JAL）、全日空（ANA）、中華航空（チャイナエアライン）、エバー航空、キャセイパシフィックにジェットスターなど、フルキャリアから格安航空会社（LCC）まで、10社以上の航空会社が日台間の航路を結んでいる。また、成田国際空港（以下、成田）や大阪の関西国際空港のみならず小松や静岡など地方空港からも台湾行きの便が開設され、気軽に日台間を行き来できるようになった。しかし、それはここ数年の話である。

日台間で多くの飛行機が飛び交うことは当たり前に見えるかもしれないが、実は10～15年ほど前まで、日台間の航空路は「特異」な状態にあった。日本のナショナルフラッグキャリアである日本航空は台湾への便を設定しておらず、また台湾のチャイナエアラインやエバー航空は成田空港を使用することができなかった。

1990年生まれの日台ハーフである筆者は、子どもの頃家族で台湾に帰るのが大好きだった。そのとき、よく乗っていたのが「日本アジア航空」である。ただ、「アジア」の二文字の意味はよく分かっていなかった。10年以上前から日台間を行き来している人ならば、きっと「日本アジア航空」（JAA／日本亞細亞航空）という航空会社の存在を記憶していることであろう。この「日本アジア航空」こそ、日台間航空路における「特異」な状態の象徴であった。日本アジア航空は、1974年に日中間の定期航空路を開設した日本航空が台湾路線を飛ばせなくなった代わりに設立された。

「国内」航路から「国際」航路へ

1895年に日本が台湾を領有すると、その翌年には船による日台定期航路が開設された。大阪商船や日本郵船の大型船が神戸と基隆を結び、神戸は台湾人が日本に渡る際にまず踏み入れる玄関口であった。日本で著名な台湾人小説家陳舜臣の一家も神戸の地に上陸して根を下ろし、「真珠王」として知られる台南出身の鄭旺（田崎真珠の田崎俊作を育てたことでも知られる）も戦中から戦後にかけて神戸

の地で活躍した。27年に台湾共産党を立ち上げた謝雪紅は、19年から3年ほど神戸にいたという。

戦前の一時期、大日本航空などが日台間で航空路を築いていたようだが、費用面や定員は船には遠く及ばなかった。いずれにせよ、日台航路は今日の在日台湾人を生み出すポンプとなっていた。44年に入ると、日本の戦局は次第に悪化し、日台航路の船が米軍によって撃沈されるという事態が相次ぐ。日本の敗戦が決定した45年8月時点において、日台間の航路は事実上の消滅状態となっており、航路の「中断」は45年12月に在日台湾人の帰国希望者の送還が始まるまで続いた。

また第二次世界大戦の終了から5年の間に、大陸では中華人民共和国が成立し、それまで大陸を統治していた中華民国は台湾に逃れた。朝鮮半島では朝鮮戦争が勃発し、南北分断が固定化されるなど、東アジアの情勢も急激に変化した。日本は連合国軍総司令部（GHQ）統治下にあつて主権の回復はしておらず、また航空禁止令が敷かれていたため日本で自前の航空会社を持つことや航空機の製造などが認められなかった。

## 航空機の台頭とにぎわう日台空路

船から飛行機へと取って代わられたことも、戦後日台航路の大きな特徴である。1950年代に入ると、ボーイング707旅客機（57年初飛行）、ダグラスDC8（58年初飛行）そしてコンベア880（59年初飛行）など4発ジェット旅客機の開発が相次いだ。コンベア880は60年にかけて、台湾の民航空運公司（CAT）や日本航空さらには香港のキャセイパシフィック航空などが導入し、日台航空路にも充当された。

CATは50年代に台湾内外の航空路線を提供した航空会社としても知られ、50年4月には台北と東京を結ぶ路線を開設した。その運航資金にはアメリカの中央情報局(CIA)からの援助があり、CATは朝鮮戦争時に国連軍の物資輸送を担うなど、民間航空会社以上の活躍をした。

67年に中華航空が台北—大阪—東京に初便を就航させた。以降、CATに代わる台湾のナショナルフラッグとして中華航空が活躍することとなった。一方、日本航空は51年に成立し、台湾路線は59年7月30日に開設された。

大阪万博の開催された70年は、日本航空が大型のボーイング747型機を導入した年でもある。この時点で、日本航空と中華航空は日台間航空路において5割近くのシェアを有し、日本航空の国際線としてはホノルル線に次ぐ稼ぎ頭となっていた。そんな日台間航空路が活況を示していた頃、台湾（中華民国）を取り巻く国際環境は急変する。71年の中華民国の国連脱退、そして翌年の日本との断交で

ある。

活況から「中断」、そして日本アジア航空の誕生へ

日本と中華民国の間で国交があり、日本の国営航空会社が台湾に就航していたことは、つまり中国への便を開設していないことを意味する。1972年9月30日、日本航空の特別便に乗った田中角栄首相は北京首都空港に降り立ち、周恩来の出迎えを受けた。その週の傍らには、日本統治時代の台湾に生まれ神戸で育ち51年に中国へと渡った林麗韞がいた。周と田中が握手を交わした場面は、長らく故郷と隔絶された状態にあった在日中国人に感動をもたらしたことであろう。しかし、それは後に台湾の航空会社が日本の空から、そして日本の航空会社が台湾の空からも消える淵源（えんげん）でもあった。

中国側は日本に対して日中航空協定締結の条件として、中台の航空機が日本の空港に並ばないこと、中華航空機が旗（中華民国国旗）を外すこと、日台間の航空協定の完全消滅の明確化などいくつかの「提案」を行っていたからである。また、日台間の航空路線の維持については条件付きで認める表明をした。

中国の提案を受け、日本の外務省ならびに運輸省（現在の国土交通省）は、①台湾には日本航空が就航しない②中華航空の大阪（伊丹）便の他空港移転③中国民航は成田空港を使用し、中華航空は羽田空港を使用する。成田空港開港前は両航空機の時間帯調整を行う④中華航空という社名と旗の性格に関する日本政府の認識は改めて明らかにする、などの案を自民党総務会に提出し、了承された。

こうして74年4月20日に北京で日中航空協定が締結された。同時に大平正芳外相は「日本政府は、台湾機にある標識をいわゆる国旗を示すものと認めていない。中華航空が国家を代表する航空会社であるとは認めていない」との談話を発表した。そのため、台湾の沈昌煥外交部長は直ちに日台間航空路の停止を発表し、翌日の便を最後に日本航空と中華航空は日台路線から撤退した。台湾との往来が必要な在日台湾人にとっては、戦後直後に次ぐ居住国と故国を結ぶ航路中断の記憶といえよう。

日台間の移動には、日本を寄港地とする大韓航空など第三国の航空会社による直行便、あるいは香港を経由するしか方法がなくなり、深刻な供給不足に陥った。ところが75年7月に宮沢喜一外相が「（台湾と国交を有する）それらの国々が青天白日旗を国旗として認識している事実をわが国は否定しない」といった答弁を行ったことで、日台の航空会社による航路の再開に向けて事態が動き出した。そして、75年8月に日本航空の子会社として「日本アジア航空」が設立され、同年9月15日に東京—台北線、翌年7月26日に大阪—台北線が開設された。一方の中華航空は75年10月1日に台北—東京線および東京経由米国行きの便を再開させるも、大阪線は再開されなかった。



## 日本アジア航空が築いたもの

それでも、「日本航空」が台湾路線を飛ばさなかったという事態は「異常」なことであろう。中国に就航する欧州の航空会社の中には、日本アジア航空に倣い、台湾路線用に機体の塗装の変更、あるいは別会社運航の形で対応するケースが見られた。今でも、アムステルダムー台北線には「KLMアジア（荷蘭亞洲航空）」の機体が充当されることがあるが、これも日本アジア航空と同様のケースである。

大げさに思われるかもしれないが、日本の社会科の教科書にある「世界の国」リストを見ても「台湾」の名が記されていないことや、台湾路線用に日本「アジア」航空が作られ、飛んでいたことは、日台ハーフの筆者にとってやり場のない疎外感を抱かせた。ただ、日本アジア航空は中国への政治的配慮によって生み出された会社ではあったが、台湾路線を主に運行するということもあって、国交の切れた日台をつなぐ架け橋として果たしてきた貢献は極めて大きいといえる。

今でこそ台湾は若い女性に人気の旅行先であるが、半世紀近く前、日本人は台湾を「男性天国」というまなざしで見えていたと聞く。そのため、かつての台湾は日本人に人気の「観光地」ではなかった。そのような中1976年2月、日本アジア航空は台湾出身の歌手ジュディ・オングを起用し、「台湾ビューティフルーツアー」と銘打った女性だけの台湾ツアーを企画した。これは女性需要の掘り起こしのスタートと位置付けられよう。以降も同社は台湾の観光をPRするCMを放映し、89年には「女性にやさしい台湾」とのキャッチフレーズが用いられた。98年からは俳優の金城武がバイクで台湾の街中を走り台湾のお茶とショウロンポウを頬張るCMが放送されていた。一連のCMによって、台湾へのイメージが向上したといっても過言ではない。

そして月日とともに日台航路にも変化が訪れる。2002年には中華航空およびエバー航空の成田空港使用は許可され、06年には中華航空が32年ぶりに大阪路線を復活させた。また、05年には中台間で直行チャーター便が運航された。こうなると、「日本アジア航空」の存在価値が揺らいでくる。08年3月31日、日本アジア航空は日本航空に吸収され、翌日より日本航空が台湾路線を「復活」させた。

日本アジア航空が幕を閉じて今年で10年。この10年の間に日台間の航空路は大きく変貌した。10年10月、それまで国内線専用空用として運用されてきた台北松山空港（1979年以前は国際線の発着空港）と東京国際空港を結ぶ定期便の就航や、15年10月には関西空港と台南を結ぶ定期便が就航したことは、日台間の航空路の盛況ぶりを物語っている。

たしかに、日本アジア航空は「特異」な存在であった。そうした中において、日台間の往来が今日に至るまで不自由なく保たれてきたことは、日本アジア航空があったからこそその成果ともいえる。

岡野翔太（おかの しょうた）

大阪大学人間科学研究科博士課程。台湾名は葉翔太。1990年兵庫県神戸市生まれ。父は1980年代に来日した台湾人、母は日本人。小学校、中学校は日本の華僑学校に進む。専攻は華僑華人学、台湾現代史、中国近現代史。著書に『交差する台湾認識－見え隠れする「国家」と「人びと」』（勉誠出版、2016年）

（注）出所：nippon comコラム（2018/03/31掲載）

台湾の若者で「注音符号」が愛されているわけ

文=nippon.com編集部 高橋郁文

[2018.06.02]



20代の若者に根強い愛着

今、台湾の若者の間で「注音符号」への愛着がかつてないほど高まっているという。

2018年3月8日、民進党の台南市長予備選の世論調査で、注音符号廃止を訴えた葉宜津立法委員（代議士）が支持率で最低となり、自身の[フェイスブック](#)が注音符号で書かれたコメントで荒らされたことが現地ニュースで話題になった。

注音符号とは、清朝末期から漢字の発音を記す方法として検討開発していたものを、中華民国が1918年に「国音字母」として公布し、最終的に名称が注音符号となったものだ。その基本構造は、漢字の一部、あるいは全部を使った37文字からなる。

中華民国が台湾に移った以降、現在でも台湾人の初等教育の場や外国人の中国語学習の場で、日本の「仮名」と同じような状況下で学ばれている。日本人学習者の間では、俗に「ボボモフォ」と呼ばれている。

一方、中華人民共和国が成立し、標準語を再整備した「普通話」の中国では、発音記号にローマ字表記による「ピンイン」が用いられ、注音符号は使われなくなった。現在、一般の中国人で注音符号の読み書きができる人はほとんどなく、辞書の発音の記述で目にするくらいだ。

台湾における中国語の「国語」と中国における中国語の「普通話」の目に見える最大の違いは、台湾の繁体字と中国の簡体字という漢字の字体と共に、発音記号で注音符号を用いるかどうかにあるとも言える。

しかし、注音符号はあくまでも発音記号であり、日本語の「仮名」のように、文献やメディアなどの

書物で漢字と混ぜて書かれることはほとんどない。台湾の街中の看板で目にする確率は、おそらく日本語の「の」の字よりも少ないのではないだろうか。ちなみにこの「の」は同じように使用される助詞の「的」が置き換えられたもので、台湾人の間で最も知られた日本語の文字、「仮名」である。

ところが、2000年以降、台湾本土化の流れが加速する中で、特にポスト民主化世代の20代の若者の間で、注音符号は単に発音記号としての枠組みを超えた存在になっているようだ。

## 独特のニュアンスが魅力に

台湾本位の考えが進む中で、言ってみれば中国由来であり、キーボード入力では「仮名入力」のようにローマ字入力以外にもう一つ入力法を覚える必要がある注音符号をいちいち学習するのは面倒だと考える台湾人は、特に戒厳令下に生まれ育った現在の中年層に見られる。彼らにとって注音符号はあくまでも発音記号でしかなく、時に上述の葉立法委員のように注音符号の廃止を訴えたりする。民主化以降の台湾で、注音符号は中国由来の過去の産物の一つとして使用停止や廃止が何度か検討されたが、そのたびにいつも台湾社会で物議を醸してきた。

一方、ポスト戒厳令世代の状況はどうだろうか。台湾の20代の若者になぜ注音符号に愛着を感じるのか聞いたところ、「単に小さい頃から使っているからではない、日本語の“の”も注音符号の“ㄉ”も“かわいい”や“柔らかい”ニュアンスがあって思わず使ってみたくなるのだ。しかし、皆が日本語の“仮名”を全部知っているとは限らない。でも注音符号なら誰もが知っている。だから使いやすい」と語っていた。

## アイデンティティーのアイコンとして定着

注音符号への愛着は、当初の表現方法の一つから、アイデンティティーという要素が注入され、いつの頃から若者の間で中国とは違う台湾の象徴の一つと捉えられるようになった。

言葉や文字は自分たちと他民族や他国家とを区別する最も分かりやすいものだが、現在の台湾人が台湾ナショナリズムを主張する際、そこには台湾の国語と中国の普通話の違いはどこにあるのかという問題に直面する。台湾には従来使用されてきた閩南語などをベースにした台湾語があるが、北京語ベースの国語が普及した現在、台湾語を読み書きまで自在に操れる人は、戒厳令下では公の使用を禁止したこともあって、台湾北部の都市部を中心に一時減少してしまった。現在、学校で台湾語教育が進められているが、台湾語がただちに唯一の国語になるのは難しい。

一方、国語と普通話の目に見える違いについては、漢字の字体で旧字体（繁体字）を使用していること、そして注音符号を使用していることがある。そのため、台湾人が注音符号という身近なところにアイデンティティーを見出すのは理解できる。生まれながらにして台湾は中国とは別であると認識している「天然独」と呼ばれる若者世代にとって、注音符号がもはや発音記号という本来の意味を超えて、アイデンティティーのアイコンになっていることには留意しておきたい。

## 台湾社会の多様性を表す試金石に

しかし、注音符號がこれから漢字に取って代わって國字として台灣社會の中で地位を築くのかと言えば、それは難しいと言わざるを得ない。

まず、注音符號は漢字の一部、あるいは全部で音を表記するのに特化した文字のため、一字でさまざまな意味を含む漢字と違い、そこに含まれる情報量は圧倒的に少ない。そのため文章は長尺化し、それまで漢字の短尺化に慣れ親しんだ人々にとって、読み書きの点でかなりの負担になる。また、例えば文章の全てを「仮名」で表記するように、全てを注音符號で表記すれば、漢字に慣れ親しんだ社会ではとにかく読みにくいと感じ、情報伝達の面で混乱が生じることは容易に想像できる。

次に、「の」を表現方法の一つとして長らく用いてきた台湾人の表現感覚から考えた際、一つの文字（漢字）による表現方法よりも多少、ローマ字や「仮名」が入った混ぜ書きの方がカッコ良く感じるようだ。しかし、これらはあくまでも表現方法の手段であって、他の文字に完全に乗り換えるということではない。日本で、平仮名、片仮名、漢字、ローマ字などを一つの文章内で用いるように、台湾でも、漢字、ローマ字、「仮名」と共に、注音符號が正式に列に加わったと見るべきである。

また、日本で漢字使用の全廃（あるいはローマ字への完全な乗り換え）が提唱はされても実際にはそうならなかったように、台湾でも漢字使用の全廃はないと考えられる。文字は情報伝達における機能がまず優先され、それを満足した上で、美しさを求めるステージに入る。漢字は注音符號に比べバラエティーに富んでおり、美しさでもかなうものではない。今後、注音符號がもっと広範に使用されることはあっても、文章の根幹を成す漢字がなくなることは考えられない。

もう一つ、一般的に「台灣華語」と呼ばれる台灣発の外国人向け中国語教育で注音符號を堅持することは、ローマ字の「ピンイン」で発音を学ぶ中国発の中国語より負担が多いことを意味する。注音符號は、いくら100年の歴史があっても発音を正しく表記できるとは言え、外国人学習者や台灣華語の国際化にとって、必ずしも有益とは言えない。

では、注音符號重視の流れはどこまで広がるのだろうか。台灣アイデンティティーを重視する若者の間で注音符號が愛着を持って使用されている現在の状況から考えると、今後、この世代が台灣社會の中核になる頃には、社會で注音符號を目にする機会はずっと増えるのかもしれない。また、台灣社會が新移民に代表される他民族や彼らの言葉をどんどん受け入れている中で、多様化の度合いはますます加速している。

台灣の若者の注音符號への愛着とそこにある思いは、台灣アイデンティティーだけの問題にとどまらず、台灣社會の多様性を表したものとして、今後も注目していきたい。

# 台湾で神社が多数造営されたわけ

## 台湾で神社が多数造営されたわけ

金子展也

1895年4月17日、日清講和条約が調印された。台湾および澎湖島の日本への割譲が決定したことにより、日本の地にしか祭られなかった神道の神々が新しく日本の領土となった台湾へ、ヒト・モノ・カネの移動に伴い、海を渡り、台湾の地に祭られた。

6年後の1901年10月27日、台湾の総鎮守として台湾神社（44年に台湾神宮に改称）が鎮座した。そして、開拓の神々である大国魂命（おおくにたまのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）および少彦名命（すくなひこなのみこと）と北白川宮能久親王（きたしらかわ・よしひさしんのう）が祭神として祭られた。

## 皇族として海外での逝去が台湾での神社創建運動のきっかけに

1895年5月31日、能久親王は日本の台湾領有に伴い、近衛師団を率いて澳底（おうてい）に上陸し、基隆から台南まで武装集団との抗争を繰り広げた。近衛師団を悩ませたのは、これまで体験したことのない、台湾特有の湿気をもった暑さと非衛生的な環境であった。能久親王も台湾南部の嘉義を越えた辺りでマラリアに感染し、高熱と下痢とに闘いながら、「平定の戦い」の最終地点である台南に到着するが、10月28日に逝去してしまう。皇族として初めて日本以外で逝去したことで、国内では能久親王を祭る神社創建運動が高まる。その後、「別格官幣社を台湾に建設する建議案」が1900年9月に衆議院で可決し、同時に内務省告示81号が告示され、台湾神社は植民地で初めての官幣大社として創建されることに決まった。能久親王の薨去（こうきよ）した10月28日を例祭日として、01年10月27日に鎮座した。

## 台湾の地方都市にも広がる神社の造営

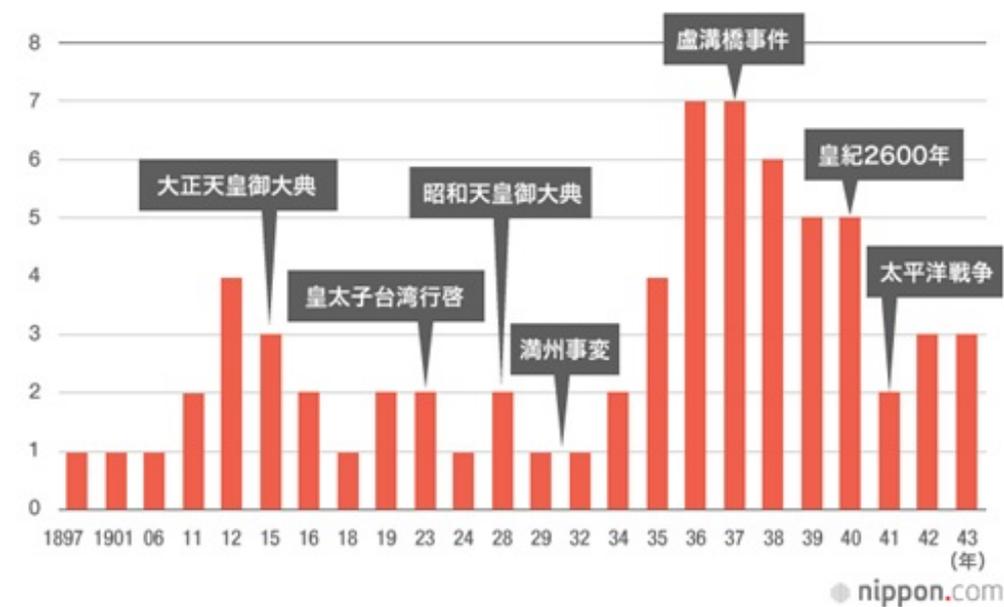
台湾神社が鎮座すると、主だった地域で一斉に神社の造営が始まった。台湾統治上の必要性は迅速な「日本化」の浸透であった。日本化とは天皇を中心とした天皇主権国家であり、その中に占める神道の神々を祭る神社は絶対的な権力の象徴でもあった。

台湾の行政地区の中心となった地方都市には県社規模の神社が造営され、台湾神社の祭神を祭り、そ

れぞれ県社として列格されていった。県社への列格年代順で見ると、開山神社（1897年）、台中神社（1913年）、嘉義神社（17年）、新竹神社（20年）、花蓮港神社（21年）、台東神社（24年）、阿緬神社（26年）、宜蘭神社（27年）、高雄神社（32年）、基隆神社（36年）、そして、澎湖神社（38年）となる。

台湾が日本となった初期では、神社造営と各種国家記念事業である御大典（大正天皇即位の礼、15年）、皇太子行啓（23年）および御大典（昭和天皇即位の礼、28年）は大いに関係があり、これらの記念事業をその神社造営の推進力とした。その後、31年9月に満州事変が発生。32年3月には満州国が樹立され、33年3月には国際連盟から脱退したことにより、日本を取巻く情勢が急変した。日本は国際情勢の緊迫化を伴う国家非常事態体制下にあった。この頃は台湾における神社の重要性が大きく変化する節目でもあった。国民に対して国威発揚、国民精神の高揚などが叫ばれ始め、国家神道に基づき、国民精神の育成が急務となり、神職会（神社本庁の前身）から神宮（伊勢神宮）大麻が主だった神社経由で本格的に頒布されていった。この過程で、地域の土地守護神として34年末、北港神社（台南州北港郡）が社格をもつ「神社」として造営され、台湾での神社造営ラッシュの先陣を切った。

## 神社造営数推移



## 神社規定の整備

1934年9月に台湾総督府文教局から「神社建設要項ニ関スル件」として、初めて「神社」に関する規定が提示された。神社には「神社」と規定される要件があった。

- (1) 必要条件として、境内入口に鳥居があり、社殿（本殿、拝殿）まで参道が通じ、参道のそばには手水（ちょうず）舎、社務所などがある。
- (2) 敷地4~5000坪（1坪3.3平方メートル）以上、本殿 5坪程度、拝殿 20坪程度とされた。
- (3) 「神社」であるためには、崇敬者または氏子は50人以上とし、その中の総代が神社に関する維

持のための一切の事務を行う義務を有する。

つまり、この要件に当てはまるのが、台湾総督府文教局社会課が発行した『台湾に於ける神社及宗教』（43年3月発行）であり、また、田村晴胤（たむら・はるとね）による『神の国日本』（45年2月発行）に掲載されている68社の神社であった。これらは、祈年祭・新嘗祭に天皇や国から奉幣（神饌＝しんせん＝以外で神に奉獻すること）や幣帛（へいはく）料（金銭での奉獻）を受ける官幣社（2社）や国幣社（3社）を筆頭に、県社（8社）、郷社（17社）、無格社（36社）、そして、台湾護国神社と建功神社を含んだ。なお、終戦間近に3社が無格社から郷社へ列格され、最終的に郷社は20社、無格社は33社となった。



往時の台湾神社（提供：水町史郎）

## 神社造営にブレーキをかけた戦争

1936年7月に総督府より「民風作興運動」が宣言され、敬神崇祖思想の普及、皇祖尊崇、そして、台湾人に対しては国語（日本語）普及および常用が求められた。その1年後の37年7月に盧溝橋事件が発生し、日中戦争へと発展する。そして、同年9月には第一次近衛内閣による「国民精神総動員運動」が提唱された。このような状況下、海軍軍人の小林躋造（こばやし・せいざう）が第17代総督に就任すると、これまでの「民風作興運動」をさらに発展させた「皇民化運動」が提唱され、改めて、地方の行政単位である街や庄にまで神社を造営しようとする「一街庄一社」政策が叫び出された。この方策として神社参拝、大麻奉斎、そして、台湾人の家庭では正庁改善（祖先位牌や道教などの神々を祭る祭壇に代わり、大麻を祭った日本式神棚への改善）や寺廟整理（寺廟の取り壊しや統合）が展開されていった。

盧溝橋事件に端を発した日中戦争に続き、41年12月に日本は太平洋戦争に突入する。この頃になると既に地方財政の疲弊が現れ始め、神社敷地の買収費を含めた神社造営費はますます巨額となった。さらに神職の確保にも支障を来したため、新たな神社造営に急ブレーキがかかった。34年に北港神社が造営されて以来、終戦までの10年間に、わずか32社の神社が造営されたにすぎない。「一街庄一社」政策は掛け声に終わり、現実的な「一郡一社」程度で終わった。

一方で、新竹神社、台中神社や嘉義神社の県社から国幣小社への列格、また、数多くの無格社を郷社へ列格（37年10月～45年4月までの間に21社）することにより、神社の尊厳さを高めた。さらに、神社とは別に、その神社の管理に属した摂末社（せつまつしゃ）の造営や遥拝所（ようはいしょ）により、国家神道の浸透を図った。

[2018.06.16]NIPPON.COMより転載

金子展也（かねこ のぶや）

1950年北海道生まれ。小樽商科大学商学部卒業。卒業後日立ハイテクノロジーズで勤務。2001年より2006年まで、台湾に駐在する。現在、神奈川大学非文字史料研究センター研究協力者として海外神社の調査、研究及び一般財団法人台湾協会評議員。著書に『台湾旧神社故地の旅案内—台湾を護った神々』（神社新報社、2015年）『台湾に渡った日本の神々』（潮書書房光人新社、2018年）







# 台湾の“素顔”に迫る

## 台湾の“素顔”に迫る

「日本が最も好き」が56%、圧倒的親日・台湾の“素顔”に迫る…海外26カ国の記者はどう見たか

出典 産経WEST 2017.5.9



大勢の若者でにぎわう台中市内の夜市

親日家が多く、欧米では「フォルモサ（麗しき島）」の愛称で親しまれてきた台湾。その魅力を世界に発信しようと、台湾の外交部（外務省に相当）が4月6～11日に海外メディア向けに実施した「プレスツアー」に参加した。行ってみると、日本からの参加者は記者ともう1人の2人だけで、ほかの参加者は北米や南米、北欧、アフリカなど26カ国の記者たち。独特の文化と親切な人々、日本統治時代の面影を残す街並みに、海外の記者たちは何を感じたのか。彼らが語る“台湾像”から、日台の関係や、「国のかたち」について考えた。（浜川太一）

九州と同じ面積に2300万人

大阪から空路で約3時間。首都にあたる台北の郊外にある台湾桃園国際空港に降り立つと、まだ肌寒かった日本とは打って変わり、湿気を含んだ熱気が迫ってきた。

台湾の面積は、九州とほぼ同じ約3万6千平方キロメートル。そこに漢民族（95%以上）や16の先住民族（2%）から成る2351万人が暮らしている。

今回、6日間の日程で台北・台中を巡るプレスツアーに参加したのは、各国の新聞・通信・雑誌社で働く記者や、フリーランスのライターら計28人。外交部職員4人の先導で名所や各種博物館、行政機関を視察し、外交政策のレクチャーを受けた。「アジア訪問自体が初めて」という参加者も多かったが、各国の記者は台湾のどこに引かれたのだろうか。

「グルメや雑貨、全てがそろって『夜市』は最高だね。ファストフードばかりでショッピングモールが主流の米国とは大違いだよ」

米国テキサス州のライフスタイル誌「イエローマガジン」の記者マット・シムスさん（54）は、台湾各地で毎晩開かれる「夜市」をベストスポットに挙げた。

台湾の食文化と人々の熱気を肌で感じられる夜市は、台湾観光の目玉として人気が高い。マツトさん以外にも、夜市や台湾の食に「一番引かれた」と話す記者が多かった。

中欧スロバキアから参加した「Dennik N」紙の女性記者ジャナ・ネーメットさん（29）が「台湾人の物作りの丁寧さと、勤勉さを感じる」として挙げたのは、「張連昌サクソフォン博物館」（台中市）。西洋のイメージが強いサクソだが、実は生産数は台湾が世界一。世界シェアは6割を超えるといい、きらびやかなサクソスが一堂に並ぶ同館では、その魅力を余すことなく味わえた。

インドネシアの女性紀行ライター、トリニティさん（44）が最も印象的だったというのは「清潔な公衆トイレ」。「台湾人はとても清潔好きね。街中もきれいで、日本とよく似ているわ」と話した。

「台湾は日本の過去を否定しない」

台湾人が最も好きな国は日本一。昨年、日本の対台湾窓口機関・交流協会（今年1月に日本台湾交流協会に改称）が発表した世論調査では、日本を「最も好きな国」と答えた台湾人の割合は、過去最高の56%に上り、2位以下の中国（6%）▽米国（5%）▽シンガポール（2%）に大差をつけた。

台湾は1895～1945年の50年間、日本統治時代を経験した。この間に日本が整備した教育制度や各種インフラが、台湾の近代化を後押ししたとして評価する台湾人は多い。

ツアー4日目に訪れた「台中刑務所演武場」は、日本時代の1937年に完成。当時の刑務所職員が体を鍛えるために建てられた施設で、台中市は2004年に歴史建築物として指定登録。その後も修復を重ね、今も地元の子供や学生たちに、剣道や柔道の練習で使われている。

南米チリの最大紙「エル・メルクリオ」の女性記者モントセラト・サンチェスさん（26）は、「台湾人は日本の過去を否定していない。彼らは日本時代の記憶を消し去るのではなく、むしろ救い出そうとしているようだ」と話す。

実際に近年でも、日本時代の家屋を改装した喫茶店やレストランが相次いで開店しているといい、外交部職員は「若者の間でも日本の人気は高い。親日の若者を指す『哈日族（ハーリーズ）』という言葉がありますよ」と教えてくれた。

「台湾を国と認めないのは間違っている」

中国と主権をめぐる係争を抱え、国際社会の大半では正式な国家として認められていない台湾。今回のツアー参加者の中には、台湾を正式な国家として承認している国の記者もいた。

週刊紙「ザ・リポーター」の記者、アレクシス・ミランさん（27）の母国ベリーズは、「カリブ

の宝石」と呼ばれる中南米の国。1981年に英国から独立し、89年から台湾と外交関係を樹立している。

現在、台湾を正式な国家として承認しているのは、ベリーズを含む21カ国。「台湾は中国の一部」とする中国の主張（「一つの中国」の原則）から、日本など主要国は、台湾と外交関係を結んでいない。

アレクシスさんは、台湾をめぐる複雑な政治環境について「隣国グアテマラと国境問題を抱える母国と、状況がとても似ている」と指摘。「経済・技術支援を通じてベリーズの独立を助けてくれた台湾は、ベリーズにとって偉大な友人。次は、ベリーズが台湾の独立と主権のために支える番だ」と力を込めた。

同様に、台湾を国家として承認しているカリブの島国セントクリストファー・ネビスの国家情報サービス局長、レスロイ・ウィリアムズさん（46）は、「台湾を国と認めないのは間違っている。われわれは国際社会に対し、台湾をメンバーの一員に迎えるよう、請願し続ける」と話した。

中国大陸との関係、8割が「現状維持」支持

国とは何か。ツアーの参加中、各国の記者に話を聞きながら、何度も頭をよぎったのがこんな問いだ。

台湾は、国際法の国家成立条件である「領土」「国民」「主権」をすべて満たしていながら、第4の要件に挙げられる「国際承認」を一部しか受けていない。台湾自身が主体的に解決することのできない難題だ。

台湾の通信社「中央通信社」は4月21日、与党・民進党系のシンクタンクが実施した最新の世論調査結果を報じた。これによると、「台湾を主権独立国家と考えるか」という質問に、74・5%の台湾人が「そう思う」と回答した一方、中国大陸との関係については、「現状維持を支持する」が79・9%に上ったという。

数字が示す人々の矛盾した心境から、台湾が置かれている特殊な政治状況が、改めて浮かび上がる。

インドの日刊英字紙「ザ・ヒンドゥー」の女性記者、キールタナ・ラジさん（31）は、「世界中で領土争いが横行し、不公平な状況が生じている中で、台湾は、その存在感を維持するため、政治的、経済的に努力し続けてきたのだと思う」と話した。

韓国紙「釜山日報」の女性記者で、友好関係を結ぶ「西日本新聞」（福岡市）で勤務した経験がある金銀英さん（51）は、「国は国、人は人。国同士の外交は大事だけど、人に関しては、今は“国民”じゃなくて、“世界市民”という視点が大事」と話した。

「矛盾のなかで生きている」

1994年に刊行された司馬遼太郎の著書『台湾紀行』（朝日新聞出版）は、日本人の台湾観の形成に、大きな影響を与えたといわれている。

司馬はその中で、複雑な政治環境に置かれている台湾を、「矛盾が幾重にもかさなっている島」と表現していた。

「よく考えてみれば、この宇宙も地上もわれわれ生命も、すべて矛盾のなかで生きている。ものは変化する。矛盾が統合し、またあたらしい矛盾を持って統合へ動いてゆく」

ツアー中、各国の記者が口をそろえたのは、「優しくて、謙虚で、笑顔が絶えない」台湾の人々の姿だった。「国とは何か」と文字で表現する方法を追究するまでもなく、そこには多彩な文化に囲まれて、“矛盾”とともに美しく暮らしている、台湾の人々の姿があった。

## 日本人新郎が体験した台湾のびっくり結婚顛末記

大洞敦史

nippon.comコラム（2018.04.28掲載）

1984年東京生まれ。明治大学理工学研究科修士課程修了。2012年台湾台南市へ移住、2015年そば店「洞蕎麦」を開業（台南市永華路一段251号）。著書『台湾環島 南風のスケッチ』（書肆侃侃房）。

### 台湾の結婚式「喜宴」は喜びを分かち合う宴会

台湾の結婚式は「喜宴」という。名の通り喜びを分かち合う宴会であり、町内の寄り合いとか、同窓会とか、素人のど自慢大会といった側面も持っている。招待客が多ければ多いほどいいとされ、400人や500人はざらで時には1000人以上が参加する。新郎新婦とその家族がグラスを手に各テーブルへあいさつに回る「敬酒」を除いて、決まったプログラムは無く、時には初めに乾杯の音頭が取られただけで、その後2時間ほど延々と出席者たちのカラオケ大会が続く、という例もあった。出席者たちは大音響の中、円卓の向こう側の人にも聞こえるよう、お互いに怒鳴るような勢いで話をする。元来おしゃべり好きな台湾人だが、この日は久しぶりに親類や友人に会えてうれしいものだから、どんなに声がしゃがれても、汗をにじませながら大声で話し続ける。そして最後に出てくるフルーツで喉を潤したら、余った料理をビニール袋に包んでばらばらに帰って行く。礼服の着用が必須で祝儀に最低3万円は包まなければならない日本の結婚式と比べると、台湾の結婚式は皆が自由な格好で、大きな負担もなく参加でき、プログラムも自由である点、おおらかで気取らず、にぎやかさを好む台湾の人々の人間性がよく表れているといえる。



台湾における僕の結婚を巡るエピソードを「準備編」と「式典編」の2回に分けて皆さんにご紹介し

たい。

## 準備編

■ 「提親」（新婦家族へのあいさつ）で「聘金」（結納金）が決まる

プロポーズが成就したら、そこから結婚式に至るまでの間には「提親」「看日子」「訂婚」「拍婚紗」「發喜帖・喜餅」という五つの大きなステップがある。ここで紹介するのは妻の両親から教えてもらった台湾南部の代表的な流儀であり、地域やエスニシティ（客家や台湾先住民など）や宗教の別により異なる流儀が存在する。

「提親」は新郎の家族が新婦の家庭へあいさつに伺うことだ。以後の段取りや金銭的な面もこの時決められるので、肝心要の部分である。話し合いの中で最も緊張が走るのが、新郎側から新婦の両親に渡される「聘金」と呼ばれる結納金の額を決める時だ。「大聘」と「小聘」に分かれており、小聘は「尿布錢」（おむつ代）とも呼ばれ、両親の養育の恩に感謝する気持ちが込められている。金額は新婦の両親の裁量に委ねられるが、相場は大聘が36万元（1元3.7円）、小聘が12万元程度。結納金が100万円程度で、場合によっては半分ほどが結納返しとして戻ってくる日本と、物価差も含めて比較すると、かなりの負担といえる。もし新婦の家族が新郎を気に入っていれば、大聘を辞退することもあるが、逆に不満がある場合は、法外な価格を提示することで破談を狙ったりもする。何百万元もの聘金を要求され、それでも結婚した夫婦が、分割払いで何年間も払い続けるというケースも時としてある。

占い師に日取りを決めてもらう「看日子」

「看日子」とは算命仙仔と呼ばれる占い師に、結婚式を挙げるのにふさわしい日取りを選んでもらうことだ。算命仙仔は新郎新婦の名前と生年月日および誕生時刻を元にそれを算出する。挙式は2016年4月3日と決められた。おまけに役所に婚姻届を出す時刻まで指定されていたのだ。

時期の良しあしについていえば、日本では欧米に倣ってジューンブライドといって6月に結婚するカップルが多いが、台湾では「有錢沒錢，娶個老婆好過年」（お金があってもなくても、妻を娶（めと）ればいい年が越せる）という俗語があり、旧正月が近くなると結婚式が増える。逆にあの世から霊が戻ってくるとされる旧暦7月に結婚する人はまずいない。ただしキリスト教徒は例外である。

「訂婚」は日本でいう結納である。新郎とその家族が仲人を伴って新婦の家を訪れ、聘金の受け渡しや指輪の交換などを行う。一連の作法が非常に細かい部分まで定められているのだが、僕の場合は国際結婚ということで訂婚自体を省略させてもらった。

「拍婚紗」はウェディングフォトの撮影だ。結婚式場の入り口には、製本された巨大な写真集がほぼ必ず置いてある。地元の観光名所、あるいはヨーロッパ風のお城とか雪国とか森や海辺などファンタジックな風景をバックに、ウェディングドレスやチャイナドレス、スーツに身を包んだ新郎新婦がうっとりとした2人の世界に浸っているもので、顔にもかなり修正が施されているから、新郎新婦を直接知っている人なら楽しんで見られる。赤の他人の物だったらちっとも興味がひかれないだろうけれど、このお伽噺（ときばなし）風写真集は1970年代にはもう広まっていたらしい。そういえば台湾にはかつて若い女性層をターゲットにした、まるで自分がアイドルになったかのような写真を撮るサービスが流行していたし、「変身写真」は今もって日本人観光客に大人気だ。コスプレ熱も日本に劣らず高いのである。憧れの俳優や仮想世界のキャラクターのようになりたい、そんな自分を見たい、という願望は誰でも多かれ少なかれ持っているものかもしれないが、それに応えるビジネスがこのように確立しているのは台湾人の商魂の表れでもあるだろう。



まさか自分があの写真集を作る日が来ようとは思ってもしなかった。まずは義父母に連れられて婚紗館と呼ばれる店へ行き、衣装を選ぶ。撮影場所は屋外かスタジオかの2択で、僕らはスタジオを選んだ。周囲の目を気にしなくていいし、移動が要らないので早く終わらせられるだろうと思ったから。ところが思惑に反し、僕らは当日朝8時から2時間かけてメイクと髪型のセットとドレスアップをし、それから実に夜7時まで、トタン造りの倉庫の中に広がるメルヘンチックな世界の中で、陽気なカメラマンの「もっと自然な笑顔で！」とか「見つめ合って！」といった要求に従うがまま、宮廷風サロンや銀世界や壁一面のバラやカフェをバックに、蜜のように甘ったるい写真を撮られ続けたのだった。

放心状態でスタジオから店に戻ると、ほほ笑みを浮かべた女性マネージャーが待っていて、写真集の大きさと枚数の交渉に入る。「これは一生の記念になるものですよ。将来夫婦げんかをした時などに写真集を開けば、新婚の頃を思い出して気持ちが穏やかになるものです」などとここんとこ意義を説かれながら。交渉は義父母に任せ、僕らはただ「顔の修正は入れないで」と拝むようにして頼んだ。

「發喜帖・喜餅」は結婚式に招待する人々に「喜帖」と呼ばれる招待状を送る際、特に新婦側の親戚・友人に限って「喜餅」と呼ばれる中華風ケーキを合わせて送る習慣を指す。数量は提親の際に新婦側が決め、費用は新郎側が負担する。相手が遠方に住んでいる場合を除き、原則的に直接相手の下を訪れて手渡ししなければならない。ある日の夜、僕と妻が喜餅を持ってバイクで友人の家に向かっている途中、無免許運転のバイクに横から追突され、救急車で病院に搬送される羽目になってしまった。運よく大事には至らなかったが。

またこれも一つの習慣で、新婦の両親が新郎に新品のスーツ一式を贈ることになっている。僕は既にスーツを持っていたので遠慮したのだが、義父母がぜひにとということで、オーダーメイドで作っていただき、その上ネクタイ、ネクタイピン、ベルト、革靴までひとそろい贈ってくださった。

慣例上は新郎側が負担すべき費用も時と場合による

他にも式場やプログラムを決めたり「新娘秘書」と呼ばれる美容師を雇ったり、嫁入り道具を買ったりとやるべきことは無数にあり、何事にも費用がかかる。僕はその頃、そば店「洞蕎麦」を開業するために貯金の大半を投じてしまっていたのだが、大変ありがたいことに、慣例上は僕が負担すべき費用のほぼ全てを、妻の両親が支出してくださった。

義父母は共に日本統治期に八田與一が築いた烏山頭ダムのほとりの農村地帯で生まれ育った。年中行事や冠婚葬祭を執り行うに当たっては伝統的な作法を重んじる人たちだ。一つには国際結婚であり、一つには僕と妻が儀式的なものに対してあまり積極的でなかったために、お二人にはかなり妥協をさせることになった。それにもかかわらず快く精神面・資金面の双方でバックアップしていただき、感謝の至りである。



大洞敦史

式典編

nippon.comコラム2018.05.06掲載

僕は、2016年4月、台湾南部の町・台南で、地元育ちの女性と結婚式を挙げた。占いで結婚式の日取りを決めたり、新婦方の親戚・友人に招待状と合わせて中華風ケーキを送ったりと、伝統的なやり方が根強く守られている現代台湾の結婚式だが、一方で結婚指輪を作るという西洋的な風習も欠かせないものになっている。それで僕らも宝飾品店で純金のペアリングを購入した。

### 時代とともに「伝統」も変化

時代の流れにつれて「伝統」も形を変えてゆく。「拍婚紗」（巨大な結婚写真集の制作）のように数十年前から一般化した習慣もあれば、徐々に廃れていく習慣もある。

これは台南で儀式用の紙人形「紙糊」を専門に制作している左藤紙藝薪傳の主人から聞いた話だが、昔は結婚式の前夜に新婦が男の子を抱いた観音菩薩の紙人形を枕に敷いて寝る風習があった。これには早く子宝が授かるようにとの祈りが込められている。しかし今ではこうしたことをしている人はほとんどいない。紙糊といえば葬式か道教の儀式に使うもの、というのが現代の一般的なイメージだが、昔は9割が誕生祝いや結婚祝いなどのめでたいことに使われていたそうだ。どうして廃れてしまったのか、と僕が尋ねると、「年寄りが若い者に教えてこなかったからさ」と主人は答えた。

結婚式当日の朝、日本ではヤクザが身につけるような純金の厚みのあるネックレスを義母が持ってきて、首に掛けるように言われた。初めは断ったのだが、伝統の装飾品だから、の一点張りで掛けさせられた。これにはどうやら妻が夫をしっかりとつなぎ留めておくための首輪という意味があるらしい。その後僕が他の人の結婚式に参加したときも、新郎が皆これを身に着けているのに気がついた。

僕と妻の家族一同は赤いリボンを巻き付けた黒の高級車に乗り、爆竹の音と共に発進して、会場の海鮮料理レストランへ向かった。台湾の結婚式はホテルやレストランの他、公民館や「流水席」と呼ばれる公道に臨時にしつらえられた宴会場など、さまざまな場所で開かれる。初めて参加した結婚式は小学校の講堂だった。「いつもの服装で来ていいから」という友人の言葉を完全には信じ切れず、暑い中長ズボンと革靴を履いていったところ、会場でTシャツ、半ズボンにサンダル履きの人をたくさん見かけて後悔した。女性も普段着でノーメイクの人が多かった。それで僕も以後の結婚式には毎回普段の服装、すなわち沖縄のかりゆしウェアに半ズボン、サンダル姿で出席している。



ご祝儀はその場で開封

妻の妹と弟が名簿への記帳係をしてくれた。出席者から「紅包」と呼ばれる赤いご祝儀袋をいただき、その人の目の前で開封して金額を名簿に書き入れていく。相場は僕が住んでいる台南のような地方都市の場合、新郎新婦の友人なら1人当たり1200元（1元3.7円）から2200元程度。日本とは逆に偶数が良しとされ、6が一番好まれる。ただし4は日本と同じく発音が「死」に通じ、8も「別」と同じ発音なので避けられる。また白は葬式を連想させる色なので、日本のご祝儀袋はほぼ使えない。

式には名士を招待し、料理はぜいたくに

一方で純白のウエディングドレスは台湾の女性にとっても憧れの的なので、一概に白が忌避されているわけでもないようだ。

結婚式場には大きなスクリーンが設置されていて、新郎新婦の写真や映像が繰り返し流れる。参加者はそれを追って見ていくことで、まるで映画を見ているように、2人の幼い頃からの成長の記録や、交際の過程が分かるようになっている。僕らもかなり時間をかけて写真を選んだ。僕が子供の頃に台湾を旅行した時の写真や、台湾での生活フォト、2人で阿里山や緑島に旅した時の写真など。いたずら心で、髪もひげも伸ばし放題にしていた16歳の時の写真を混ぜたら、けっこう受けていた。

台湾では結婚式に地元の名士を招待する慣習があり、この日は地元の政治家である郭國文氏、林燕祝氏、姜金堂氏、台日友好交流協会理事長の郭貞慧氏が壇上で祝辞を贈ってくださった。民進党の人も国民党の人もいるが、義父によれば顔見知りなので問題はないという。皆ご祝儀まで包んでくれたと感心していた。

豪華な料理を盛った大皿が次々に各円卓へ運ばれる。カラスミ、おこわ、鶏を丸ごと煮込んだ漢方スープ、煮込み魚、大きなゆでエビなどが定番だ。鶏は台湾の言葉で「ゲ」というが、これは結婚の「結」および「家」と同じ発音なので、切らずにお客に出される。魚は「餘」に通じ、「余るほどの富」を象徴する。赤はめでたい色の代表なので、エビや唐辛子も好まれる。義父は料理の内容を基準にこの会場を選んだそうで、後日多くの友人たちも口々に料理の豪華さを褒めたたえていた。





### 「敬酒」と呼ばれる乾杯回り

残念ながら僕は「敬酒」で各テーブルを回っている間にかなり時間が過ぎてしまい、ほとんど口でできなかつたが。ちなみに台湾の宴会でアルコール類を一人で飲んでいるとムードが盛り上がらない。誰かがグラスを掲げた時に、周囲の人々と祝福の言葉を掛け合いながら飲むべきものだ。

式が忙しいのも、家族のつながりが強いから

式の進行は僕の友人たちに全面的に協力していただいた。茶人でありピアニストでもある黎瑞菊さんに司会を、普段台北101のレストランで演奏されている葉昶氏に伴奏を、プロのカメラマンである蔡宗昇氏と林太平氏に撮影を、それぞれお願いした。作家の一青妙さんからも祝辞をいただき、イラストレーターの佐々木千絵さんに代読してもらった。



封茶を行う新郎新婦

出し物としては、台南の有名なティーショップ「奉茶」のオーナーであり詩人でもある葉東泰氏が僕らのために書いた詩を読んでくれ、また「囍」の字が書かれ、中に茶葉の入った青花磁器を贈ってくださいました。ふたは赤いシールで封がされているのでこれを「封茶」という。一種のタイムカプセルのように、何十年もたってから開けて中の茶を楽しむものだそう。他にもプロのビリヤード選手として活躍されている北山亜紀子さんにカーペンターズの歌を歌ってもらい、ぼくも沖縄三線で「涙そうそう」と台湾民謡「望春風」を歌った。最後にヤマサキタツヤさん、青山京子さん、いいあいさん、佐々木千絵さんと、プロのイラストレーターが4人も日本から参加して下さっていたので、会場の皆にジャンケンをしてもらい、勝ち抜いた4人に彼らが似顔絵を描いてあげるといふ余興も行った。

僕らが経験した結婚式までに至る一連の過程は、ある程度、普通よりは簡単に省略した形ではあったが、それでも毎日目が回るほどの忙しさだった。もしも何から何までしきり通りに進めようとしたら、気が遠くなるような時間と労力を要するに違いない。両家の家族が総出で取り組まなければできないことだ。古い伝統が今もなお生きているのは、家族同士のつながりが日本よりもずっと緊密な台湾だからこそなのだろう。

(注) 本稿の写真は全て筆者の提供したものです。



## 小確幸～台湾あれこれ

<http://p.booklog.jp/book/122890>

著者：喜早天海

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kisousan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122890>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト